

宇都宮共和大学の地域社会連携・地域貢献ポリシー

宇都宮共和大学は、須賀学園の教育理念を踏まえ、大学の目的として、「時代の潮流と社会の要請を見極め、常に知識と能力を向上させるとともに大学を地域社会における知的交流の場とし、さらに経済、教育、文化の振興と社会の向上に貢献できる人材を育成することを目的とする」（学則第1条）と定めている。

宇都宮共和大学は、栃木県内に3つのキャンパスと活動拠点を有しており、学園の100年を超える伝統を生かしながら、絶えず「まち」、「ひと」に視点を当て栃木県央を中心とする北関東圏の「地域社会」の経済、教育、文化の向上と発展のために貢献することを目的とする大学である。

この目的を達成するために、本学は、「社会連携・社会貢献に関する方針」を次の通り定める。

1. 目的と使命

本学は、地域社会と連携し、時代の要請に応え、将来地元で地域社会の発展に貢献し、活躍できる人材を養成することに努める。

2. 産学官の連携

本学は、企業、自治体、各種団体・組織、市民等と積極的に連携し、地域社会の発展に貢献できるように努める。

3. 地域活動の拠点

本学は、本学の有する教育・研究資源を積極的に地域社会へ提供し、地域の教育・文化活動の拠点となるよう努める。

4. 地域貢献活動への支援

本学は、教職員・学生が、研究・教育の成果を地域社会に発信する活動及び教職員・学生が地域の活動や行政施策の助言者等として参画することを積極的に支援する。教職員は、「宇都宮共和大学コンプライアンス規程」の重要性を認識し、高い倫理観を持って行動する。

(平成29年11月1日制定)

子育て支援研究センター年報 第15号 2025

目 次

I. 子育て支援研究センター2024年度公開講座報告	1
公開講座の概要	1
II. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育 実践報告	2
III. Tiny (障がいのある子どもと家族の支援) 実践報告	13
IV. 親子遊びの会－子育てネットワークづくりプロジェクト－実践報告	28
V. 卒業生のためのリカレント教育実践報告	33
VI. 地域産学官連携活動報告	39
1. 子どもと一緒に脱炭素！幼児期から始めるCN教育	
大学コンソーシアムとちぎ「カーボンニュートラル推進学生地域活動支援事業」	39
2. 大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」	49
3. 大学コンソーシアムとちぎ第21回学生&企業研究発表報告	56
4. 宇都宮市環境学習センター事業の実施	60
5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ	
「大学連携親子ワークショッププログラム」報告	65
1. 自然を感じよう～紅花でコースターを染める～	65
2. つくってあそぼう	
～家庭にあるモノや廃材を教材化し、てづくりおもちゃをつくる～	66
3. 親子リトミック	67
VII. 宇都宮共和大学子ども生活学部卒業研究	70
1. 2024年度卒業研究題目一覧	70
2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会第38回学生研究発表報告	72

資 料

I. 2024年度子育て支援研究センター事業報告	79
II. 2024年度子ども生活学部専任教員の社会貢献活動	83
III. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程	87
IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領	89

(表紙裏) 宇都宮共和大学社会貢献ポリシー

(裏表紙裏) 『子どもの育ちと保育』(案内宣伝)

I. 子育て支援研究センター2024年度公開講座報告

1. 公開講座の概要

1. 目的：幼稚園教諭・保育士や子どもの教育・保育に関わる仕事に従事している学校教職員・行政職員・一般市民を対象に、その専門的知識や技術を研究し、あわせて大学教員と交流することを目的とする。

2. 2024年度テーマ：乳幼児期の保育の質の重要性

3. 場所：宇都宮共和大学・宇都宮短期大学 長坂キャンパス 5号館501教室（第40回）

4. 日程と講座内容

第40回 講演会 7月27日（土） 13：30～15：30	叱らなくても子どもは伸びる 子どもが最高に力を発揮する子育て 教育評論家 親野 智可等 氏
-------------------------------------	--

<第40回>

講師：親野 智可等 氏

教育評論家。本名、杉山佳一。長年の教師経験をもとに、子育て、しつけ、親子関係、勉強法、学力向上、家庭教育について具体的に提案。『子育て365日』『反抗期まるごと解決BOOK』などベストセラー多数。人気マンガ「ドラゴン桜」の指南役としても著名。

Ⅱ. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育実践報告

子ども生活学部 教授 市川 舞
教授 桂木 奈巳

1 はじめに

子ども生活学部の開設以来、地域の就学前施設との交流保育を授業に位置づけ実践している。授業を通して子どもと出会い、子どもから学ぶことができるこの取り組みは、本学の保育者養成教育の特色の1つでもある。今年度は、本学の校地を活かした来校型の交流保育に加え、前年度に引き続き訪問型の交流保育を試みた。以下、令和6年度の取り組みについて報告する。

2 令和6年度の交流保育計画

令和6年度の計画を表1に示す。今年度は宇都宮市内の就学前施設4園と連携し、計10回の交流保育を実施した。「こどもの森」を活かした来校型の交流保育は、年3回実施、1年生が担当した。学生の教材提案を活かした交流保育は、4～5月に4年生が4回、1月に3年生が3回（うち1回は感染症拡大予防のため中止）実施した。

表1 令和6（2024）年度 交流保育計画

1. 校地（こどもの森、アリーナなど）を活用した交流保育（1年生の交流）

（1）連携園：認定しらゆりこども園 岩本春枝園長（宇都宮市若草4-13-12）

関連授業：フィールドワークⅠ、保育内容総合演習Ⅰ、
保育原理、保育内容総論（子ども生活学部1年38名）

授業主担当：桂木、市川、小野

- ① 2024.6.5（水）年中児86名 テーマ：春の自然に親しむ
- ② 2024.12.3（火）年中児86名 テーマ：秋の自然に親しむ
- ③ 2025.1.24（金）年中児86名 テーマ：いろいろな遊びを楽しもう

2. 学生による教材提案を活かした交流保育（3年生の実践）

テーマ：いろいろな遊びを楽しもう

関連授業：保育内容総合演習Ⅲ（子ども生活学部3年生54名）

主な教材：縄、ひっくり返し、編む

授業担当および引率：桂木、市川、月橋、小野

（1）連携園：認定みどりこども園 岩本眞砂枝園長（宇都宮市西原町3335-2）

④ 日程：2025.1.15（水） ※インフルエンザ流行につき中止

場所：認定みどりこども園

（2）連携園：認定こども園釜井台幼稚園 山崎英明園長（宇都宮市下岡本町4548-4）

⑤ 日程：2024.1.15（水）

場所：認定こども園釜井台幼稚園

（3）連携園：風とみどりの認定こども園 熊倉仁園長（宇都宮市下栗631-2）

⑥ 日程：2024.1.15（水）

場所：風とみどりの認定こども園

3. 学生による教材提案を活かした交流保育（4年生の実践）

連携園：認定みどりこども園 岩本眞砂枝園長（宇都宮市西原町3335-2）

テーマ：いろいろな遊びを楽しもう

関連授業：保育内容総合演習Ⅳ（子ども生活学部4年53名）

授業担当および引率：市川、田淵、桂木、小野

日程：⑦ 2024.4.30（火）年長53名、年中41名、三原色、段ボール積み、せっけん遊び、土粘土

⑧ 2024.5.1（水）年長53名、年中41名、新聞紙、土粘土、空き容器

⑨ 2024.5.7（火）年長53名、年中41名、ストロー飛行機、手作り楽器、色水遊び、自然

⑩ 2024.5.8（水）年長53名、年中41名、花紙遊び、宝探し、音探し

3 校地を活かした交流保育

校地を生かした交流保育では、認定しらゆりこども園の4歳児クラス（86名）が春・秋・冬の3回、園外保育として来校し、子ども生活学部1年生の学生（38名）が交流した。事前学習や実践を「フィールドワークⅠ」、交流保育の振り返りを「保育原理」「保育内容総論」「保育内容総合演習Ⅰ」の各授業で行い、科目間連携による学習の充実を図った。

(1) 第1回交流保育

- 1) 日 時 2024年6月5日（水）1 - 2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス こどもの森
- 3) テーマ 春の自然に親しむ
- 4) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備	・身支度確認 ・トイレに踏み台
10:10	先発 園出発		・森の入口に消毒設置
10:30	○先発来校（2クラス） ・森の学生駐車場に到着 ・森の探検 発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。 〔 ・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場 〕 ・子どもが話しかけてきた際には応じる。 ・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
10:55	○後発来校（2クラス）	・後発の到着にあわせて森の入り口まで出迎えに行く。	・お手洗いにいきたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
11:25	○先発帰園		
11:55	○後発帰園		

5) 活動の様子

子どもは初めて訪れる森だったが、事前に保育教諭が森を下見したことで、来校前に子どもたちのイメージや期待感を膨らませており、比較的スムーズに森の自然に親しむ様子だった。



木の皮に虫を発見



光の怪物が来た！

(2) 第2回交流保育

- 1) 日 時 2024年12月3日(火) 1-2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス こどもの森
- 3) テーマ 秋の自然に親しむ
- 4) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境整備	・身支度確認 ・トイレに踏み台
10:10	先発 園出発		・森の入口に消毒設置
10:30	○先発来校(2クラス) ・森の学生駐車場に到着 ・森の探検 発見や見立てなどを楽しんだり、体を動かしたりしながら、森の自然に親しむ	・見守りを中心としながら、子どもの活動を観察する。 〔・立ち入り禁止区域の入り口 ・倒木など安全面の配慮が必要な場〕 ・子どもが話しかけてきた際には応じる。 ・子どもの発見や疑問を受け止めつつ、子どもに返す関わりとなるように留意する。	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する ・お手洗いにいきたい子どもはアリーナに誘導。保育教諭に必ず報告。
10:55	○後発来校(2クラス)	・後発の到着にあわせて森の入り口まで出迎えに行く。	
11:25	○先発帰園		
11:55	○後発帰園		

5) 活動の様子

前回の森の活動を思い返しながら、意欲的に森の中を探索する姿があった。めあてを持って森を散策し、「〇〇に～があるよ」など子ども同士が言葉で伝えあう姿も見られた。



赤い実みつけた



どっちが長い？

(3) 第3回交流保育

- 1) 日 時 2025年1月24日（金）1 - 2限
- 2) 場 所 長坂キャンパス アリーナ、グラウンド
- 3) テーマ いろいろな遊びを楽しもう
- 4) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
9:10		・学生集合、出席確認 活動の留意事項の確認、環境構成	・身支度確認 ・トイレに踏み台
10:30	・来校 (先発2クラス) ・アリーナ前到着 ・凧作り、凧あげ ・サーキット ・ボール、縄	・子どもを迎える。 ・保育教諭の指示の下、凧作りを援助する ・子どもとグラウンドで遊ぶ ▶子どもの意欲や主体性を大切に、一緒に遊ぶ、見守るなど様々な関わり方を試みる ▶発達過程に配慮し、子どもの実態に応じて挑戦できるよう関わる *必要に応じて、縄・ボール・等用意	・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
11:10	来校（後発2クラス） 先発2クラス帰園	・後発の到着にあわせて入り口まで出迎えに行く。	・お手洗いにいきたい子どもは誘導し、保育教諭に必ず報告。
11:40	・帰園	・帰園を見守る	

5) 活動の様子

はじめてのアリーナの空間の広さに驚く子どもの姿もあった。園から持参したへび凧作りに加え、巧技台など新しい環境に関心をひらき、好きな遊びに取り組もうとする子どもの姿があった。なかには他児が環境と関わる姿をじっと眺め、確かめてから遊びに取り掛かろうとする子どもの姿もあった。学生は遊びのモデルとなるような動きをしてみせたり、楽しい雰囲気づくりをしたり、励ましたり、試行錯誤しながら子どもの意欲を引き出す状況づくりを試みる姿があった。



ここを切るんだね



巧技台ではしご渡り

4 3年生による訪問型の交流保育

「保育内容総合演習Ⅲ」を履修する3年生による教材研究をもとに、3園の連携園と教育課程に係る保育終了後の時間を活用させていただき、訪問型の交流保育を計画した。テーマは「いろいろな遊びを楽しもう」とし、主な教材として縄、段ボール板、毛糸を設定した。なお、1園はインフルエンザ感染予防のため前日に中止となった。

今年度は昨年の反省を生かし、本実践の計画に先立ち「事前オリエンテーション」を実施いただいた。事前に学生が各園を訪問し、園の保育方針、保育環境、時期の子どもの姿など細やかにご教授いただき、教材研究および保育の計画立案に生かした。

(1) 認定こども園釜井台幼稚園との交流

- 1) 日 時 2025年1月15日(水) 3-4限
- 2) 場 所 認定こども園釜井台幼稚園
- 3) 参加者 2号認定の年少児、年中児、年長児
- 4) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
14:30		<ul style="list-style-type: none"> ・園に学生集合、出席確認、職員室に挨拶 ・環境構成、教材準備 ※環境構成に際しては、園の先生に場所等ご教示いただく 	<ul style="list-style-type: none"> ・身支度確認 ・健康確認
15:30	<ul style="list-style-type: none"> ・集まり ・挨拶 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 縄・ひっくりかえし・けん玉・毛糸 	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもと対面し、挨拶をする。 ・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみたい」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせるなど、よい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
16:30	<ul style="list-style-type: none"> ・順次降園 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け、挨拶 ・解散、帰宅 	

5) 活動の様子

教育課程にかかる保育時間終了後、1階のアーケードと隣接する2つの保育室に3つの遊びの場、4つの教材を提案した。それぞれの場を行き来できる環境構成としたが、一つの遊びをじっくり味わう子どもの姿が目立った。特に毛糸の場では、編む仕組みを考えながら粘り強く教材と関わる姿が印象的だった。活動の展開に応じて学生同士が連携しあい、補助に入ったり遊びの動線を整えたりするなどして、その都度の子どもの状況に応じて柔軟に保育に臨んだ。



ぼくのけん玉作ろう



ひっくり返し、よーいスタート!



へび鬼じゃんけん—縄—



リリアン編み—毛糸—

(2) 風と緑の認定こども園との交流

- 1) 日 時 2025年1月15日(水) 3-4限
- 2) 場 所 風と緑の認定こども園
- 3) 参加者 年少児、年中児、年長児の2号認定の子ども
- 4) 活動の流れ

時間	子どもの活動	学生の動き	備考
13:30		<ul style="list-style-type: none"> ・園に学生集合、出席確認、職員室に挨拶 ・園環境の確認 ・環境構成、教材準備 	<ul style="list-style-type: none"> ・身支度確認 ・健康確認
14:30	<ul style="list-style-type: none"> ・集まり ・挨拶 ・遊びの紹介をみる ・やりたい遊びをする 縄(広場)毛糸、ひっくりかえし(保育室) 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境構成に際しては、園の先生に場所等ご教示いただく ・子どもと対面、挨拶 ・遊びの紹介をする ・それぞれの遊びの場で援助する ▶子どもの「やってみたい」意欲を大切にかかわる ▶一緒に体を動かす、声や調子を合わせるなど、よい雰囲気づくりを心掛ける。 ▶一人一人の子どもの取り組みを見守る、認める、励ます、モデルになる等さまざまなかかわりを試みながら、その子どもなりの挑戦を支える 	<ul style="list-style-type: none"> ・安全には十分に留意し、体調不良やケガ等は必ず保育者に報告する ・子どもの様子に留意し、適宜水分補給する
15:00	おやつ		
16:30	<ul style="list-style-type: none"> 遊びの続き ・順次降園 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け、挨拶 ・解散、帰宅 	

5) 活動の様子

遊びの紹介の後、子どもたちがそれぞれやりたい遊びを選ぶと一か所でじっくり遊びこむ姿があった。子どもたちは、環境と関わるにつれ、徐々に試行錯誤しながら自分なりのやり方や挑戦をするようになり、学生の援助も子ども姿に寄り添う、子どもの活動の動線を整える、環境の再構成をする、といった役割へと調整していき、共に保育環境をつくろうとする意識が見られた。



編むに集中



みんなでタイミングを合わせて大縄



全体重をかけて！綱引き



小さいコマでひっくり返し

5 4年生による訪問型の交流保育

認定みどりこども園の協力のもと、「保育内容総合演習Ⅳ」を履修する4年生による教材提案型の交流保育を計画・実践した。今年度の暦の関係で、大型連休の狭間の平日を活用することができた。園では「大型連休の特別な遊び」として位置づけて下さり、午前中の保育時間に訪問させていただいた。前年の反省を生かし、子どもの姿に即した実践が可能となるように、事前オリエンテーションを実施いただいた。園の保育方針や園の環境、時期の子ども姿などご教示いただき、計画立案に生かした。表2に示すように計4日間、4歳児クラス、5歳児クラスで実践させていただいた。学生は16グループに分かれ、事前オリエンテーションで得た子どもの姿の情報から保育のねらい・内容をたちあげて教材研究に取り組み、指導計画の立案をした。

表2 認定みどりこども園における交流保育計画

日時	クラス	教材提案	活動場所
4/30 (火) 10:30-11:30	4歳児	そら ①3原色	ピロティ
		にじ ②段ボール箱積み	ホール
	5歳児	ほし ③せっけん遊び	ピロティ
		つき ④土粘土	ピロティ
5/1 (水) 10:30-11:30	4歳児	そら ⑤新聞紙遊び	ホール
		にじ ⑥新聞紙遊び	ホール
	5歳児	ほし ⑦空き容器	保育室
		つき ⑧土粘土	ピロティ
5/7 (火) 10:30-11:30	4歳児	そら ⑨ストロー飛行機	ホール
		にじ ⑩手作り楽器づくり	テラス
	5歳児	ほし ⑪自然 神経衰弱	ピロティ
		つき ⑫自然 色水遊び	ピロティ
5/8 (水) 10:30-11:30	4歳児	そら ⑬花紙遊び	ホール
		にじ ⑭花紙遊び	ホール
	5歳児	ほし ⑮宝探し	保育室
		つき ⑯音みつけ	テラス

(1) 交流保育の流れ

各日、各グループおおよそ以下の流れで取り組んだ。

時間	予想される子どもの活動	学生の動き
9:30		<ul style="list-style-type: none"> ・学生集合、出席確認、健康チェック表の確認 ・活動の留意事項の確認 ・園長、主任にあいさつ、注意事項確認 ・環境構成
10:30	<ul style="list-style-type: none"> ・クラス活動 ・あいさつ ・環境の紹介を聞く ・好きな遊び ※一つの環境にじっくり取り組む ※自分なりのやり方を試す ※遊びと遊びを繋げる 	<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの紹介をする ・子どもの興味・関心を引き出しつつ、その子どもなりのペースに添って援助する ・見守る、励ます、一緒に活動するなど、子どもの実態に即しつつ、子どもが主体的に活動できるよう援助する。 ・子どものイメージに則りながら、教材を出す、しまう、場を整えるなど環境の再構成をする ・時間の見通しを伝え、片付けを伝える
11:30	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け、あいさつ 	<ul style="list-style-type: none"> ・一緒に片づけることで、片づけ方を伝えていく。 ・振り返り ・片付け、挨拶、帰校

(2) 交流保育の様子

1) 4/30 (火)



①3原色 混色を楽しむ



②段ボール もっと高く！



③せっけん遊び クリームみたい！



④土粘土 高さをあじわう

2) 5/1 (水) の交流保育の様子



⑤新聞紙遊び おふとんみたい



⑥新聞紙 身に付けて「すてきでしょ？」



⑦空き容器 高さを求めて



⑧土粘土 重さを感じる「持ち上げたい」

3) 5/7 (火) の交流保育の様子



⑨ストロー飛行機 完成！



⑩手作り楽器 どんな音かな？



⑪自然 同じ葉っぱのカードを探す



⑫自然 すりこぎで色水

4) 5/8 (水) の交流保育の様子



⑬花紙 繊維によって裂く



⑭花紙 サーキュレーターで紙が舞う



⑮宝探し



⑯音みつけ

6 おわりに

今年度も校地を活かした来校型の交流保育に加え、学生の教材提案による訪問型の交流保育を試みた。1年生の学生にとっては、自然と出会う子どもの姿を中心に年間を通して交流することで、授業で学んでいる保育の基本や子どもの発達過程を、経験を通して理解を深める機会となった。また、3・4年生が経験させていただいた教材研究－計画立案－実践の試みは、保育者養成教育において大変貴重な機会である。保育の環境を構成し、実践する難しさを伴う活動ではあるが、園の先生方にご助言いただき、同級生と協働して保育を実践させていただく意義は大きい。

一方、検討すべき課題として園との連携の在り方が挙げられる。特に、4年生は園の教育課程に係る保育時間内に実践させていただいた。連携園では「大型連休中の特別な遊び」として位置づけていただいたが、その年の暦によるところが大きく、次年度以降の継続については、連携園と慎重に協議する必要がある。今年度の反省を、次年度以降の計画に生かし、より適切かつ互恵的な連携の在り方を模索していきたい。

謝辞

交流保育にご協力くださいました、認定みどりこども園、認定しらゆりこども園、認定こども園釜井台幼稚園、風と緑の認定こども園のみなさまに深く感謝申し上げます。

Ⅲ. T i n y（障がいのある子どもと家族の支援）実践報告

子ども生活学部 准教授 大島 美知恵

1. はじめに

T i n yの活動は今年で13年目を迎えた。障がいの有無にかかわらず、安心して遊びながら、学生・教員・保護者・子どもたちが互いに交流し、子どもたちの発達支援につながればとの願いをもって活動を続けてきた。

昨年度はコロナ以降行われていなかった本学のホールでのT i n yファミリーコンサート、そして参加者を限定せず一般に参加者を募集する「あそびの集い」を復活することができた。そして今年度は「あそびの集い」を一般募集で2回行い、ファミリーコンサートは「太鼓と芝居のたまっ子座」をお迎えし、演奏者も参加者も一緒に演奏を楽しむワークショップ形式で開催することができた。まだ「あそびの集い」の回数やおやつタイムは自粛しての活動となったが、少しずつ、新たな試みも見られ、学生にとっても参加者の皆さんにとってもより良い方法を模索してきた1年であった。その中にはコロナ禍で得たことが、また別の形で活かされていることもあり、経験に無駄はないのだということを改めて感じる機会となった。

今年度の各々の活動について報告していきたい。

2. 「あそびの集い」

(1) 第50回「あそびの集い」の実践

昨年度の1回目の活動は新型コロナウイルス感染症法上の位置づけが5類に移行されてから、まだ2か月ということもあり、近隣自治体のこども発達支援センターと協力し、参加者を限定した「ふれあいT i n y隊」の活動を行い、2回目の活動からアフターコロナへの転換を受けて、一般募集へと移行した。今年度は1回目から一般募集で開催し、地域の親子が自由に参加できるようにしたが、「ふれあいT i n y隊」で培った地域施設からの子どもたちの参加も受け入れられるように土曜日開催とした。

これが功を奏し、参加人数が10日前まで4～5名と伸び悩んでいたところ、学生がアルバイト先の放課後等デイサービスへ働きかけ、職員と共に16名の子どもたちが参加することとなった。しかし、その後、一般も申し込みが増え続け、総勢子ども25名、大人17名という賑やかな会となった。

●活動の概略

1. 日 時：6月29日（土）13時00分～15時00分
2. 場 所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内 容：パネルシアター、楽器活動、描画、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
4. 参 加 者：障害のある乳幼児・児童とご家族（子ども9名 保護者7名）
児童発達支援放課後等デイサービス（子ども16名 職員10名）
計：子ども25名、大人17名
5. 参加学生：子ども生活学部4年生4名、3年生6名、2年生2名、1年生7名
計19名

●実施までの準備

今回のメインの活動は、大きな模造紙を使用して描画を行う活動であった。参加する子ども達の障害特性を念頭に置き、描画に必要な絵具や道具をどれにするのか、どのくらいの分量を用意するのか、それらをどのように準備しておく子どもたちが描きやすいのかなどについて、4年生を中心に実際に自分たちで描く作業を行いながら試行錯誤を繰り返し準備を進めた。例えば絵具に重曹を混ぜると絵具が柔らかな粘土のようになり、立体的に紙の上に描かれる。またざらざらとした触感もあり、視覚と触覚で楽しめる素材となるが、触覚過敏をかかえる子どもたちには苦痛となる。よって絵具に触れなくても描ける道具を用意するといった配慮があげられる。

その他、楽器活動や身体活動などについてもグループを作り、分担をして準備を進めた。グループの構成は、初めて参加する1年生のみのグループができないよう、上級生が各グループに入ってアドバイスをしながら作業を進められるようにした。

●当日の活動の様子

既に述べたように、今回は一般の親子での参加と、事業所の職員と子ども達の参加があり、コロナ禍に行っていた「ふれあいTiny隊」と通常の「あそびの集い」を合わせた新たな形態で行うこととなった。年齢層も障がいの程度も幅広く、様々な反応があり、賑やかな集いとなった。

今回は子どもたちの人数が多かったこともあり、学生たちは自然に子ども達の側に寄り添い、関わりを持つことができていた。特に描画の活動では自由な楽しい時間になる反面、子どもたちも気持ちが高まりトラブルが起きやすい時間帯であるが、学生たちが1対1で子ども達のサポートにあたり、子ども達の表現を受け止め、共に楽しむ姿が見られた。子どもたちも自分の思いつくがままに、自由に手や足、道具を使用して思いきり表現している様子が伺えた。また手や足についた絵具を洗い流す為、水回りに子どもたちが集まる場面もあったが、滑って転倒することなどが無いよう水回りに教員が常駐し、安全管理に努めた。アンケートでも家庭や施設ではなかなかできない遊びとして好評だった。

その他、楽器活動や身体活動、パネルシアターなどの活動では、進行はほぼ上級生が担っていたが、今回初めて参加した1年生もサポートの立場で子どもたちの前に立ち、生き生きとした表情で参加していた。

また当日参加できなかった学生も準備にはしっかりと取り組み、終了後のミーティングでも情報を共有した。

表1. 第50回ふれあいTiny隊の活動プロトコル

項目・目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1. 始まりの認識 ・活動、場面の切り替え ※アセスメント	手をつないでこんにちは	タンブリン	歌いながら対象者に名前を呼びかけタンブリンを鳴らしてもらう
2. 楽器活動 ・注視 ・自己表現 ・コミュニケーション	きらきら星 たなばたさま	指鈴 鈴 水マラカス ツリーチャイム (追加)	・音楽を聞いて自由に鳴らす ・音楽の遅速に合わせて楽器を鳴らす ・Go Stop ・1人ずつ自由に鳴らす
3. 身体活動 ・ボディイメージ ・固有感覚	サンサンたいそう	音源	音楽に合わせて体を動かす
4. 手遊び ・発語を促す ・模倣 ・注視	パンダうさぎコアラ	ピアノ	ノーマルな手遊びをする。 オリジナル「ゾウさん(パオーン)・たぬき(ポンポン)・小鳥(チュッチュ)」の手遊びをする。
5. 視覚活動 ・注視 ・鑑賞	あめふりくまのこ	パネルシアター	ピアノ伴奏に合わせて、パネルシアターを動かす。
6. 描画 ・触覚 ・自己表現 ・コミュニケーション		模造紙、絵具、 重曹、刷毛 ローラー	大きな模造紙に手や足、ローラー、刷毛などに絵具をつけて描く。
7. 視覚活動 ・場面の切り替え ・注視 ・発語	誰かがきたよ	シルエットペーパー サート(雨Ver)	歌に合わせてペーパーサートを動かして、子どもたちと関わりをもつ。
8. 鑑賞 ・鎮静 ・集中	トトロメドレー	フルート (歌)	フルートのデュエット演奏を鑑賞する。 歌える子どもたちは歌いながら聞く。
9. 歌唱 ・共有感・一体感を味わう	にじ	ピアノ	ピアノの伴奏に合わせて皆で歌う。 学生は手話しながら歌う。
10. 終わりの歌 ・終わりの認識 ・鎮静	さよなら	エナジーチャイム	学生が鳴らした音を、一人ずつ指で押さえて消してもらう



写真1. 描画の活動



写真2. 手遊び「パンダうさぎコアラ」



写真3. ペープサート「あめふりくまのこ」

(2) 第51回「あそびの集い」の実践

今回はコロナ以降「あそびの集い」が復活して3回目となり、学生たちも教員も互いに段取りが理解できるようになってきていることが伺えた。春休み中の為、時間をかけた打ち合わせが難しい状況の中でも学生たちが自主的に連絡を取り合い、準備を進めることができていた。

1回目の活動では、子どもの数に対して大人が多すぎると圧迫感があるため、1年生の参加を半分の人数に制限していたが、申し込み締め切りぎりぎり参加者数が一気に増えた為、今回は学生数を制限することなく、参加したい学生は全員参加とした。ところが、日曜日開催なので事業所からの参加は見込めず、更に季節柄、雪の予報や感染症の流行等の影響から参加者数は伸び悩んだ。しかし少ない人数だからこそ知り得たことや、関わり、経験もあったようである。

●活動の概略

1. 日 時：2月9日（日）10時00分～11時45分
2. 場 所：宇都宮共和大学5号館4階 保育実習室
3. 内 容：ペープサート、製作活動、楽器活動、身体活動、音楽鑑賞等を通しての交流
4. 参 加 者：地域に在住する障がいのある乳幼児・児童とその家族
(子ども8名 保護者6名 計14名)
5. 参加学生：子ども生活学部4年生2名、3年生7名、1年生10名 計19名

●実施までの準備

今回は昨年度にも行った「コーナー遊び」がメインの活動となった為、各コーナーごとにグループを作り、そのグループ内で話し合い、準備を進めることとした。2年生は実習直前ということで当日は参加できなかったが、準備についてはアイデアを出すなどの積極的な参加が見られた。また春休み期間中にも関わらず、準備の為に大学に来て作業をしている1年生の姿もちらほらと見かけた。

また、これまで長年使用してきた「誰かが来たよ」のペープサートの絵を1枚追加することになったが、他の人が製作すると、絵の雰囲気が変わってしまうため、それを作成した卒業生に製作を依頼すると快く引き受けてくれた。更に他の絵についても「日に焼けてきたから」とすべてを作り直してくれた。

T i n yの活動を始めたばかりの1年生から5年前の卒業生までが活動の準備に、自分なりの方法で参加してくれたことに感慨深いものがあった。

●当日の活動の様子

既述のように、参加の子どもたちの数に対して、学生数がとても多くなってしまったが、コーナー遊びをメインの活動としていた為、学生たちは自分の担当するコーナーで子どもたちと関わる機会を持つことができた。どこか一つのコーナーに子どもが固まってしまうこともなく、自分たちのペースで楽しむことができていた。また人数が少なく順番待ちや材料の数の制限などの必要がなかった為、思い思いにやりたいことをやり尽くし、更に学生との間で新たな遊びを展開するなど充実した時間が過ごせたようであった。「おきあがりこぼし」のコーナーでは、子どもがおきあがりこぼしを振って音を出して楽器として楽しむ姿などが見られた。この他にも学生たちが準備したものから、予定していたものとは違う遊びが次々と繰り広げられ、学生たちも子どもたちの豊かな発想力に感心していた。

保護者アンケートからも学生たちがしっかりと子どもを見守りつつ、遊びに誘ってくれるので、安心して場にいることができたとの感想を頂いた。一方、教員による子育て相談を希望する声もあったので検討をしていきたい。

終了後のミーティングや学生の記録文に書かれた意見では、参加人数が少なかったことに対して「保護者とも話す時間がゆっくり取れた」「子どもの様子をじっくり観察しながら関わられた」と人数が少なかったことを活かした学びを記した学生と、「人数が少なすぎるので土曜日に開催した方が良い」など今後の方法を考える意見があった。

表2. 第51回あそびの集いの活動プロトコル

目的	使用曲	使用楽器	活動内容
1. 始まりの認識 ・活動、場面の切り替え ※アセスメント	手をつないでこんにちは	タンブリン	歌いながら対象者に名前を呼びかけタンブリンを鳴らしてもらう
2. 楽器活動 ・音色を楽しむ ・遅速を感じる	ゆき	鈴	様々な鈴を鳴らして楽しむ
3. コーナー遊び ・自己選択			・チョコすくい ・ゆきだるまの的当て ・ゆきだるまのおきあがりこぼし ・手袋製作 それぞれのコーナーでの遊びを楽しむ
4. 素材の活動 ・注視 ・発散	即興	お花紙 うちわ	お花紙で遊ぶ➡紙をちぎる➡集める➡うちわで巻き上げる
5. 製作活動 ・自己表現			ビニールにお花紙を入れて、吊るし雪だるまをつくる。持ち帰ってもらう。
6. 視覚活動 ・注視・発語	誰かがきたよ（アンパンマンVer）	ペプサート	歌に合わせてペプサートを動かし、子ども達がシルエットを当てる。
7. 鑑賞（ベル）	ドレミの歌	ベル・ピアノ	ベルの演奏を聴く
8. 鑑賞（歌） ・鎮静 ・集中	世界が一つになるまで	ピアノ	3年生が前で歌う
9. 歌唱 ・共有や一体感を味わう	ひまわりの歌	ピアノ	みんなで歌う
10. 終わりの認識 ・鎮静 ・状況の切り替え	さよなら	エナジーチャイム	一人ひとりエナジーチャイムを指で押さえ、音を消してもらう



写真4. コーナー遊び 「チョコすくい」



写真5. コーナー遊び 「手袋製作」



写真6. コーナー遊び 「的あて&おきあがりこぼし」



写真7. お花紙あそび



写真8. みんなと一緒に歌唱活動

3. Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくても子どもからおとなまでみんなが楽しい音楽のつどい～

Tinyファミリーコンサートは本年度、第12回を迎えた。今回はダウン症協会栃木支部つくりの会のご協力を得て、サン・アビリティーズにて「たまっこ座」をお迎えしての開催となった。

(1) 開催までの道のり

昨年度は4年ぶりに本学ホールでのコンサートを行ったが、今年度は「太鼓と芝居のたまっこ座」をお迎えし、宇都宮市サン・アビリティーズ体育館を借りて演奏とワークショップを行った。サン・アビリティーズはコロナ禍の中、冷暖房完備で換気もできて、多くの人が集まれる場所を探し、開拓した会場である。今回はワークショップがあるため、参加者が演奏者の元へスムーズに出入りできることが必要ということで、こちらの会場を利用することにした。障がいのある人の教養・文化および体育の向上を図り、社会参加を促進するための施設であるため、障がいのある方が利用しやすい設備が整っており、運営しやすい場所である。会場を借りるにあたっては、ダウン症協会栃木支部の饗庭様に会場との交渉等々ご協力を頂いた。



図1. 第12回Tinyファミリーコンサートのチラシ

「太鼓と芝居のたまっこ座」は日本の伝統的な和太鼓や鳴り物楽器を使用した演奏のほか、パントマイム、舞踏的な表現を組み合わせた独自の舞台を日本国内はもとより、海外にも数多く届けている劇団である。Tinyでは2020年度に演奏依頼をしていたにも関わらず、コロナの影響で中止となった。ようやく人と人とが関りながら演奏を楽しむ「ワークショップ」ができる状態となり、お迎えすることができた。予算や来場者の状況に合わせてメンバー構成や内容を考えてくださり、学生のコラボ演奏にも快く対応してくださった。

学生たちは本番に向けてミーティングを重ね、役割分担を決めたり準備を進めた。3年生は実習を控え、当日参加はできないメンバーもいたが、チラシの作成、配布等々で協力してくれた。また近年はドラムサークル（手作り楽器を参加者全員に配付しての即興演奏）で演奏者とのコラボ演奏をしているが、今回はワークショップそのものがドラムサークルと似通った活動の為、お箏とのコラボ演奏を行うこととした。2年生にお箏を演奏できる学生がおり、楽譜の準備、練習、録音データを作成し先方へ送る作業などを行った。

(2) コンサート当日の様子

●催しの概略

1. 日 時：2024年10月6日（土）13時30分～15時00分
2. 場 所：サン・アビリティーズ
3. 内 容：たまっこ座の演奏とワークショップ
4. 参加者：障がいの有無にかかわらず乳児から高齢者までどなたでも
(一般参加者は108名)
5. ボランティアスタッフ（Tiny隊および卒業生）：
子ども生活学部：4年生 3名、3年生 4名、2年生 4名、1年生 13名

短大音楽科：2年生 1名

計25名

●当日の活動の様子

学生たちは朝早くから集まり、会場の清掃、受付の設営等々、開始に向けて準備を行った。また、たまっ子座の皆さんが到着してからは、大量の和太鼓の運搬から配置までを指示を受けながら行っていた。この会場に来たのが初めての学生も多く、何がどこにあるのか分からない部分については、卒業生やダウン症協会の方のサポートを得ながら進めることができた。ただ、ワークショップという方法が、これまでにない初めての経験だったので、客席の並べ方について意思疎通がうまくいかず並べ変えることがあり、鑑賞のみのコンサートにはない課題も見つかった。今後、コンサートの企画も多様化していく中で、一つの学びとなった。

今回はダウン症協会の協力があったこともあり、参加申し込みが多く、3日前に100名を超えた為、事前申し込み受付を締め切った。全ての参加希望者を受け入れることができなかったのは、非常に残念であったが、安全性も考慮して判断した。当日は、乳児から高齢者まで幅広い年齢層の方々、また、自力で動くことが難しい方、自閉症やダウン症の方なども含め多様な方々が参加された。

たまっ子座の冒頭の緊張感とユーモアの溢れたパフォーマンスに参加者は直ぐに引き込まれていた。その後は順番に数名ずつ前に出て、本物の種類豊富な太鼓や珍しい小物楽器を演奏して楽しんでいった。手指機能に障がいのある方もサポートを受けながらバチを取り演奏されるなど、障害があっても各々の方法で表現されている様子が随所に見られた。たまっ子座の正規メンバーの2人に加え、メンバーの姪の女子中学生も加わって場を盛り上げてくれた。休憩後には学生のお箏とのコラボ演奏、そして最後には迫力ある太鼓演奏を鑑賞し終了となった。参加者のアンケートからも演奏は勿論の事、一緒に皆で演奏できたことを喜ばれている意見が多くあった。

学生たちは終了後も参加者の見送り、会場の片付け等々を担い、最後はたまっ子座の皆さんと意見交換をする時間も設けていただいた。海外公演の際のお話や、子どもを引き付ける技術のこと、太鼓が人に影響を与える力のことなどが話題に挙がっていた。

そして、今回は卒業生が自身の子どもを連れて来ていたり、T i n y 元代表の土沢先生も足を運んでくださり、過去メンバーとの交流の場にもなった。



写真9. 迫力あるパフォーマンス



写真10. お箏とのコラボ演奏



写真11. 子どもも大人も楽しめたワークショップ



写真12. 出演者を囲んで、Tiny隊メンバーと共に

(3) 参加者対象の事後アンケート結果

コンサート終了後に参加者アンケートを実施した。紙面でのアンケートを長らく実施していたが、昨年度から 구글フォームと紙面のどちらか選んで回答できるようにした。昨年度、グーグルフォームの導入で回答率が下がった為、アンケートのアナウンスをしっかりと行ったが、やはり回答率は挙がらなかった。回答時間を確保するなどの工夫が更に必要と感じた。

コンサートの内容については高評価を得られ、参加型であったことや、なかなか触れることのできない楽器に何度も触れることができたこと、子どもも大人も一緒に参加して楽しめたことなどが理由に挙がっていた。

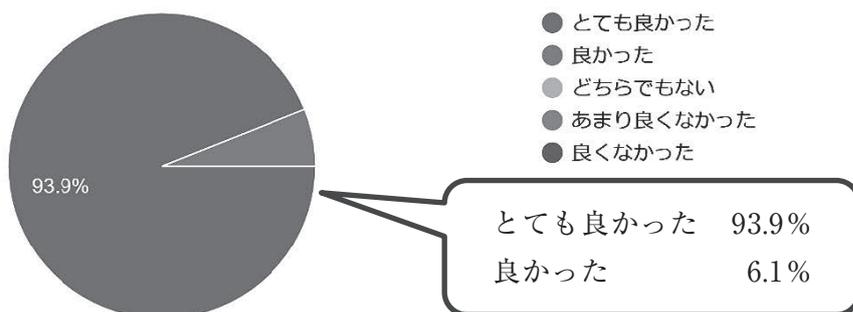
コンサートを知った情報源は、やはりダウン症協会からのお知らせが圧倒的に多かったが、その他、これまでにお世話になってきている様々な関係者や関係団体がコンサートを紹介をしてくださっていることが分かった。

スタッフや学生ボランティアについては概ね好評で、「お姉さんが優しかった」などの自由記述もあったが、もう少し積極的に子ども達と関わって欲しいという意見もあった。やはり3年生は子ども達と同じ場所に座り、関りを持っていたが、1年生については、ワークショップという初めての形式で、更に参加学生も多かったので自分から役割を見つけるのが難しかったようで後方で鑑賞している学生が数名いた。前へ行くよう指示するも、なかなか関わりを持つのは難しい様子であった。今後の反省点として検討していきたい。

参加者の年齢層としては成人と小学生が多かった。現在、あそびの集いでは未就学児を中心に小学生までというくくりで実施しているが、チラシ配布の宣伝活動は未就学児の施設である。今後、特別支援学校の小学部への働きかけも必要なのかもしれない。また以前に一度だけ開催して好評であった成人の余暇活動としての集いも検討していきたい。

1. 本日のコンサートはいかがでしたか？

33件の回答

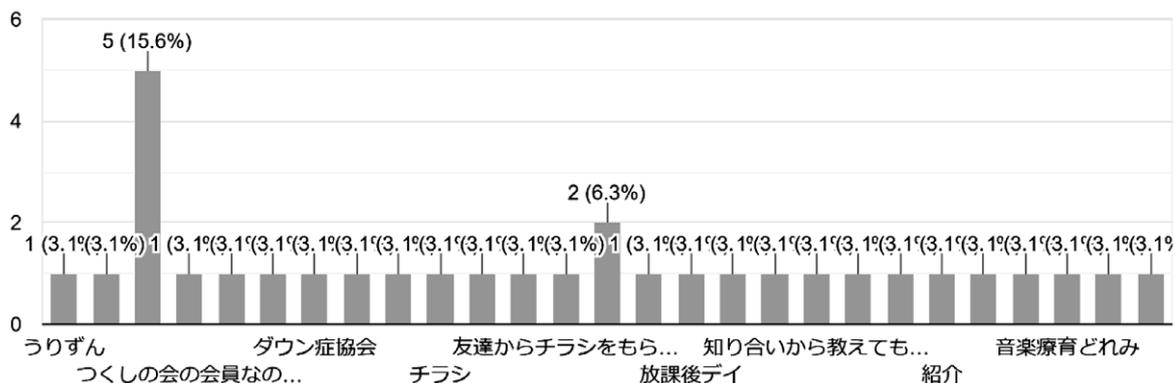


2. 1の回答の理由・感想など（自由記述） 33件の回答

- ・初参加で子供が自ら手を上げて太鼓をたたっている様子が見れてよかった。離れた場所から見守るということも初めてでした
- ・沢山の人が一緒に参加できてとっても良かった。また、身体を使ってたたく太鼓は皆とても楽しそうだった
- ・子供が参加出来てとても楽しそうだった
- ・太鼓が心地よかった。子供達が楽しそうだった
- ・迫力満点の太鼓で参加出来てよかった
- ・全員参加できるように声をかけてもらえて、はじめ恥ずかしかった子たちも太鼓をたくさん叩くことができてよかった
- ・たいこ等、なかなか実物をさわれない楽器を身近で演奏を聴くだけでなく、体験できて良かったです。
- ・和気あいあいとして、大人も子供も参加されて凄く楽しい雰囲気を感じられた
- ・演奏も素晴らしかったが、体験型だったのがさらに良かった
- ・本物の和太鼓と触れる良い機会でした！笑いとおもしろいひとときでした！ありがとうございました！
- ・太鼓が楽しかったです。体操もたのしかったです。ボランティアのお姉さんがとっても優しくかった。
- ・初めて和太鼓を叩けて嬉しかったです
- ・太鼓の音が凄かった
- ・楽しい雰囲気であったため音にビックリすることなく一緒に楽しめました。
- ・子供が太鼓が好きで、参加しやすいのも良かったです。大人の体操もいいと思いました。
- ・小さい子でも楽しめました
- ・初めて参加してしまいましたが、楽しかったです。
- ・大好きな太鼓をたくさん叩かせてもらえ、たまこ座さんの素晴らしい演奏が聴けたから
- ・太鼓の数が多く、体験が十分に出来て、楽しめた。観客の引き付け方が上手。
- ・大きな空間で自由に楽しむことができて、良い時間でした！
- ・参加型のコンサートで親子で楽しめたので
- ・たまこ座の方々のパフォーマンスが素晴らしかった
- ・かっこよくポーズがきめていいなと思います

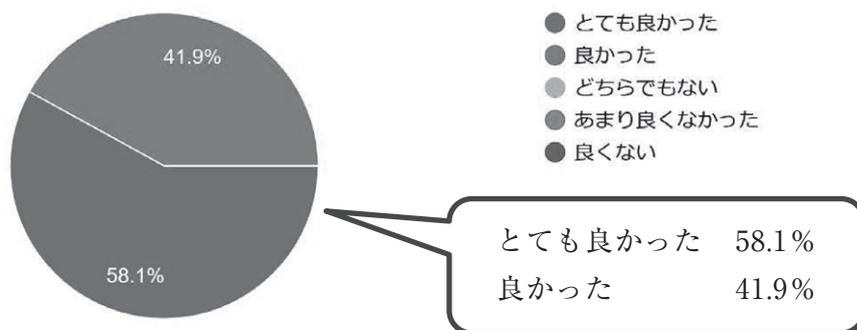
3. このコンサートを何でお知りになりましたか？

32件の回答



4. スタッフや学生ボランティアの対応について

31件の回答

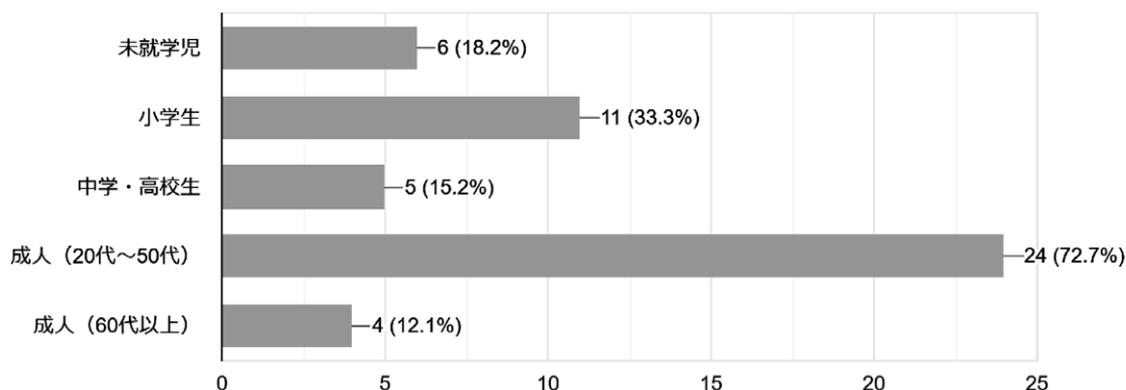


5. その他、お気づきの点、ご要望などありましたら、ご自由にお書きください 9件の回答

- ・積極的に参加できないゆっくりの子が出遅れてしまうのをフォローしていただけるとより楽しめたと思う。
- ・学生さんがもっと子供達にサポートしてくれたらよかった
- ・子供達と一緒に座り、関わるとなお良かったように思いました。
- ・駐車場が広くて良かったです
- ・身障者用駐車場が停めやすく、会場も入りやすかったです。
- ・無料で有り難いと思いましたが、今回の公演はかなりお金がかかったであろうから、参加費集めてもよかったのではと、心配になりました。
- ・やっぱりTinyの活動は、楽しい！！のびのび参加する人たちを見て、やっぱり素敵な活動だなあって思いました。また遊びに行きます！！
- ・また開催してほしいです。ありがとうございました。

6. 参加された方の年代について教えてください（複数回答可）

33件の回答



4. その他のTinyとしての活動

(1) 長坂キャンパスの大学祭（彩音祭）でのワークショップと展示活動

11月16（土）～17日（日）にかけて実施された大学祭では、ワークショップと展示、体験コーナーを行った。

展示では、これまでのTinyの活動、音楽療法のボランティア活動や研究発表の内容が展示された。また体験コーナーとして音楽療法で使用される楽器に触れていただいたり、「ふれあいTiny隊」で行ったコーナー遊びを再現し自由に遊んでもらったりした。その他、学生がシフトを組んで交代で子ども達に教えながら、毛糸を使ったどんぐりづくりやラパンチェルの壁紙を製作するコーナーも設けた。家族で会話をしながら、それぞれの個性を活かした製作物が仕上がっていた。学生たちも子どもへの説明の仕方を先輩から学んでいる様子が見受けられた。

例年行ってきた音楽療法ワークショップは、これまで1日目の10:00～11:00に行っていたが、午前中に参加者を集めることが難しく、学生たちもクラスの催し物との関連で1時間決まった時間を合わせるのが難しい。またワークショップがあることで部屋の展示の転換に大人数が必要でその人員確保が難しいことから、大幅に内容を変更した。今年度は15分間のドラムサークル（手作り太鼓を参加者全員に渡してファシリテーターのリードの元、即興的に演奏する）を1日4回実施した。時間は一応11:00、12:00、13:00、14:00と決めておいたが、その時間帯の状況により、参加者が集まっていない時には実施せず、多く集まっている時には早目に始めるなど臨機応変に対応した。これまでのワークショップでは子ども向けの内容になっていたが、ドラムサークルは年齢を問わず誰もが楽しめる内容であることから大変好評で、老若男女、多くの方が出席して下さった。短時間であるが1日4回開催されることで、展示の部屋にも連日活気が溢れていた。次年度もこの方法を継続していく予定である。



写真13. ラプンツェルの壁画づくり



写真14. ドラムサークル

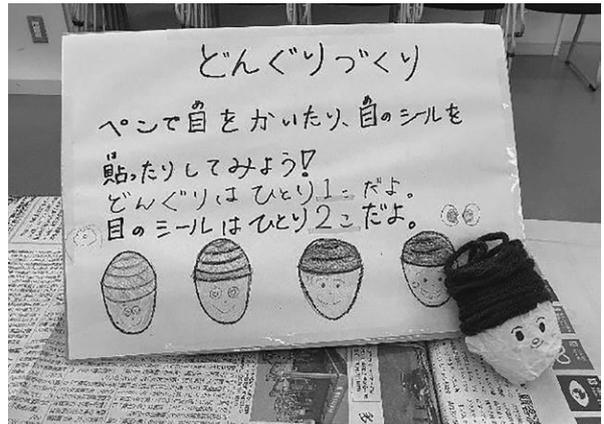


写真15. 毛糸を使ったどんぐり製作

5. まとめに変えて

今年度の活動を振り返ると、新たな試みが幾つかあった。あそびの集いでは、施設の子どもたちと一般親子の両方の参加を受け入れたこと。数年ぶりに描画の活動を取り入れたこと、コンサートをワークショップ形式で行ったこと、彩音祭ではドラムサークルを行ったことなどが挙げられる。それぞれに新しい試みを行うには、これまでとは異なった配慮や準備が必要で、学生も我々教員もそれらに対応するため新たな経験をし、多くのことを学ぶ1年であったと実感している。手探りの部分もあったが、各回とも何とか好評をいただける活動ができたことに安堵している。また、この新たな試みによりダウン症協会の皆様、放課後等デイサービスの皆様など多くの方々の支援を頂き、活動の輪が広がっていることにも感謝したい。

新たな試みにチャレンジする一方で、定着してきた内容もある。学生たちが各活動項目でグループを作り、準備にあたる方法である。コロナ以前は短大の音楽療法士専攻コースの学生がプログラムを作り、合間のパネルシアターなどを子ども生活学部の学生が行うという方法が主であったが、近年はTiny隊全員でプログラムを考えてから、各グループを作り、全員が活動に関わる方法になってきている。グループを作ることで他学年との交流もあり、障がいのある子どもに必要な配慮などを上級生から学ぶ機会になっていると考えられる。保護者アンケートでは、「学生さんがついてくれるので安心していただける」という意見を頂いているが、より一層、学生たちと子ども達、そして保護者が自然に関われるように活動を通してコーディネートしていきたい。

T i n yでは、活動に参加する子どもの意外な面を見て笑ったり感心したり、日常では問題になる行動も何らかの方法で社会的行動として受け止められて安心したり、とにかく共にいることが楽しい、そんなほっこりとした場になるよう願っている。障がいの有無にかかわらず、子どもたちも保護者も、そして子どもに関わる職員の皆さんも共に安心・安全に遊べる場として定着していくよう来年度も取り組んでいきたい。

この1年、陰日向となり活動を支えてくれた松岡先生、実習前後でも春休みでも頑張って活動に参加してくれたT i n y隊の学生たち、そして活動を支えてくれた多くの関係者の皆様へ感謝申し上げます。そして卒業生や元代表の土沢先生、元教員メンバーの星先生も応援にかけつけてくださいました。過去のT i n y経験者から多くのサポートを頂きながら2024年度の活動を終えることができたことにも感謝致します。

☆T i n yの活動メンバー

宇都宮共和大学子ども生活学部

教 員 大島美知恵

松岡 展世

サークルT i n y 隊の学生たち

IV. 「親子遊びの会」 ー子育てネットワークづくりプロジェクトー 実践報告

子ども生活学部 専任講師 小 野 貴 之
子ども生活学部 教授 杉 本 太 平

1. はじめに

「親子遊びの会」は、これまで地域の子育て支援を学生ボランティアが中心となって様々な行事を主催してきた。今年度は「地域で繋がる新しい出会い」を目標として、地域の子育て支援サークルとの連携を深め、人との繋がりから子育て支援のネットワーク広げていく試みを実践した。

アンケートの保護者の声からも、学生が主体的に活動を展開していることや、学生が一人ひとりの子どもに丁寧に関わる様子を評価していただいた。活動に参加した子どもの様子や保護者に向けたアンケートの結果等を踏まえて、今後も活動がさらに発展していくことができるように努めていきたい。

2. プロジェクトの目的

地域に暮らす未就学児をもつ家庭を対象として、父親を含めた親子同士、家族同士、異世代間の交流を目的とし、学生・教員ともに地域における役割について検討する。

活動に際しては、対象者が主体的に参加できることを目指し、親子で遊び、円滑な親子関係、親子同士の繋がりを促せるような援助のあり方について学生と教員ともに学ぶ。

3. 親子遊びの会2024年度の活動の計画

(1) 参加対象者

地域に在住の未就学児をもつ家庭

(2) スタッフ

教員と学生が活動内容について企画、準備を行い、当日の運営、援助等にあたる。

(3) 実施場所

本学施設 ミナテラスとちぎ

4. 実施した活動の概要

教員と学生有志ボランティアが検討した計画に沿って、各回のイベントの内容を決定し、当日までの準備を学内で行った。主には昼休みや放課後の時間を利用して、製作物の製作、司会、絵本の読み聞かせの練習を行った。当日は、親子が楽しんで安全に参加できるようにサポート役を務めた。

2024年度開催一覧

回 (通算)	開催日	活動内容	参加者 子ども	参加者 保護者	学生	教員	場所
1回 (52回)	2024年 7月6日	七夕の会	10人	7人	17人	3人	本学保育実習室、 講義室
2回 (53回)	2024年 11月9日	親子フィットネス	11人	10人	22人	2人	本学アリーナ
3回 (54回)	2024年 12月15日	お正月遊び	16人	20人	8人	3人	ミナテラスとちぎ

※12月に実施した「共和大・宇短大クリスマスマーケットinシティキャンパス」に共催参加

第52回親子遊びの会

活動の概略

1. 日 時：7月6日（土）10時00分～11時30分
2. 場 所：本学保育実習室
3. 参加者：子10名、母6名、父1名、学生17名、教員3名 合計37名
(1歳児4名、2歳2名、5歳児4名)

活動の内容と進め方

1. 内 容：テーマ「七夕の会」
 - ・3つのコーナーを中心に遊ぶ
(絵具で大きな紙やダンボールハウスに絵を描く、ダンボールタワー、魚釣り)
 - ・(後半) 子どもと一緒に七夕の短冊に願い事を書き、「たなばたさま」の歌を歌った
2. プロジェクト参加教員：杉本、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：(4年生) 西川綺華、根本桃華
(3年生) 秋野詩織、満田萌、村上芽唯、大貫陽香
(1年生) 清水亜海、田野實伊吹、黒尾羽衣音、佐藤初音、田村真也、金子暖奈、岡部天音、坂本乃々華、佐藤有純、戸辺龍、中山怜那

4. 事前準備

打ち合わせ、準備、練習のため計5回集合して進めた。

5. 当日のスケジュール

- | | |
|-------------|----------------------------------|
| 8:30～ | 学生集合、現地にて準備 |
| 9:45～ | 参加者受付・入室 |
| 10:00～10:15 | ごあいさつ、エビカニクス |
| 10:15～11:10 | 3つのコーナーを中心に遊ぶ |
| 11:10～11:30 | (大人) 懇談、アンケート (子ども) 七夕の短冊に願い事を書く |
| 11:30～12:00 | 解散・片付け |
| 12:00～13:00 | 学生振り返り |



6. 活動の振り返り

学生が主体的に運営を行い、事前の準備では遊びのコーナーごとに分かれて意見の伝えあい

や協力して取り組む姿が見られた。遊びのコーナーは子どもが主体的に遊びを展開していくためには、どのような環境の配慮が必要かを考えながら進めることができた。活動の際には子どもの気持ちや考えを大切にしながら関り、安全性を考慮しながら行うことができていた。また、子どもだけでなく保護者の方々ともたくさん話をして交流する様子が見られた。



保護者の方々からは「子どもたちが普段はあまりできない遊びを楽しそうに遊ぶ姿を見ることができて良かったです」「夢を持っている学生さん達が一生懸命笑顔で接してくれて子どもが嬉しそうでした」「コロナ禍であまりイベントに行けなかったので、また参加したいと思います」「活動の時間が2時間くらいあると嬉しい」等の感想をいただいた。

子ども、保護者、学生の関りが活発に行われており子育て支援の場作りの意義があることを感じた。

第53回親子遊びの会実施報告書

活動の概略

1. 日 時：2024年11月9日（土）10時30分～12時00分
2. 場 所：本学アリーナ
3. 参加者：7家族（子11人、母7人、父3人）、学生22名、教員2名 合計45名
（0歳2人、1歳2人、2歳5人、5歳2人）

活動の内容と進め方

1. 内 容：「親子フィットネス」
 - ・親子でフィットネス「スタジオHappy Smile ピラティスインストラクター」柴田清美先生
「フリーインストラクター」坂内ひろみ先生
 - ・おうちでできる親子フィットネス
 - ・家族同士や学生との交流
 - ・大学と地域の子育てサークルとの協働の試み
2. 当日の参加教員（当日）：杉本、小野
3. 当日の参加学生：（4年生）西川綺華、根本桃華、櫻井寿成、阿部さとみ、野沢秀太、池田泰誠
（3年生）秋野詩織、大貫陽香、小林歩未、満田萌、村上芽唯、丹野真瞳、宇加地菜々美
（1年生）田野實伊吹、黒尾羽衣音、佐藤初音、田村真也、金子暖奈、岡部天音、坂本乃々華、佐藤有純、中山怜那
4. 事前準備
保護者代表との打ち合わせ、学内準備、研修、練習など半年間に計10回程度の準備の機会があった。

5. 当日のスケジュール

- 9:00～ 学生集合、準備
- 10:00～ 参加者受付
- 10:30 挨拶、参加者紹介
- 10:40～11:50 親子フィットネス
サーキット遊び
保護者対象フィットネス
制作遊び、運動遊び
- 11:50～12:00 アンケート
- 12:00～13:00 解散・片付け・振り返り



6. 活動の振り返り

「Kodomomフィットネス」「とちぎ多胎ネット」の方々と連携し、スタジオHappy Smile ピラティスインストラクターの講師をお招きして親子フィットネスを行った。活動は未就園の子どもたちが多く参加された。保護者の方からは、「学生さん達が明るく接してくれて良かったです。子どもも楽しく過ごせて嬉しそうでした」「ゆっくりと体を動かせてリフレッシュできました」との感想をいただいた。

活動を通して、学生は親子のふれあいをねらいとした運動遊びや、安全に配慮して活動を行うための留意点等、様々なことを学ぶことができたのではないかと思われる。

第54回親子遊びの会実施報告

活動の概略

1. 日 時：12月15日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 内 容：テーマ「お正月遊び」
お正月の飾りや凧など身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つき、など学生が計画実践する。
4. 対象者：2歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）
募集：親子10組程度
参加者募集と受付 栃木トヨタが窓口

活動の進め方とタイムスケジュール

1. 参加者：保護者20人 子ども16名 + 学生8名 + 教員3名 合計47名
2. プロジェクト参加教員：杉本、田所、小野
3. プロジェクト参加学生：（3年生）秋野詩織、大貫陽香、小林歩未
（1年生）黒尾羽衣音、金子暖奈、岡部天音
（特 例）佐藤有純、柳沢愛
4. 事前準備
第1回 11月7日（木） 昼休み 内容検討 スケジュールの確認
第2回 11月14日（木） 昼休み 役割分担 手作り素材準備

第3回 11月29日（金） 昼休み 練習
第4回 12月13日（金） 昼休み 最終打ち合わせ

5. 当日のスケジュール

9：00 現地集合
9：30 会場設営と準備
10：15 参加者受付
10：30 開始
11：30 終了 参加者見送り後、掃除・片付け
12：00 学生・教員解散



活動の振り返り

今回から4年生から引き継ぎ、3年生が主体となり計画・準備を進めていた。また、本学のプログラムを楽しみにしてくれているリピーターの方も家族で参加されていた。保護者の方からは、「なかなかさみをうまく使えない子どもに対して優しく教えていただけで助かりました」「子ども目線で一つ一つの動きの説明をしてくれたので、子どもがとても楽しそうでした」「子どもや大人が沢山いる中で話したりするのは緊張するとは思いますが、皆さん素晴らしいので恥ずかしがらず自信を持って手遊び歌や説明をしてもらえたらと思います」との感想をいただいた。

5. 第21回「学生&企業研究発表会」において「鹿沼相互信用金庫理事長賞」を受賞

地域の未就学児を持つ家庭を対象にした子育て支援活動を通して、地域の活性化や学生ボランティアの育成に貢献してきたことが評価された。また、学生有志の活動であり、会の数週間前からの準備にも熱心に取り組んでいて、親子の触れ合いから学び、経験者の多くが保育・福祉人材として巣立っている点も受賞の理由となった。

6. 活動の振り返りと今後に向けて

本会では、これまで大学を拠点とした子育て支援活動の可能性を広げるとともに、地域の子育て支援団体・サークルと連携し、大学を地域の子育て支援団体・サークルを繋ぐ拠点として機能させていく試みを展開してきた。

2025年度は、これまでの取り組みを踏まえ、①大学と地域が協働して子育て支援に取り組む新たなモデルの構築、②活動を通じて学生が得た学びや気づきを整理・分析し、子育て支援に関わる人材育成の視点から、大学教育と地域実践をつなぐ意義や可能性を明らかにするという二つの柱をもとに、さらに活動を発展させていきたいと考えている。

(親子遊びの会 子育てネットワークづくり事業メンバー)

代表	教授	杉本 太平
子ども生活学部	教授	河田 隆
	専任講師	小野 貴之
子育て支援研究センター客員研究員	非常勤講師	田所 順子
子育て支援研究センター客員研究員		今村 麻子

V. 卒業生のためのリカレント教育実践報告

子ども生活学部 准教授 石本真紀

1. はじめに

子ども生活学部は平成23年に改組し、4年制の保育者養成校となった。本学では一期生を社会に送り出すにあたり、平成27年度から卒業生のためのリカレント教育を開始している。

現在、保育者の人材不足、また保育者の早期離職が問題となっている。その問題の背景には、保育現場の多忙、仕事量が多いことなど様々な要因が重なり合っている。

保育者の早期離職を防ぐためには、就労継続を可能とする卒業生への支援が必要である。そのためには、卒業生が生涯学び続ける保育者としていきいきと長く保育の現場で活躍できるようなサポート体制を組織的におこない、学び直しが可能なリカレント教育が必要である。

2024（令和6）年度は、計2回の卒業生のためのリカレント教育を実施した。本稿では計2回の実施内容と今後の課題や方向性について報告する。

2. 卒業生のためのリカレント教育「卒業生の集い」

(1) 目的

主に保育現場で活躍する卒業生のリカレント教育を行い、保育者としての育ちを支え、短期離職を防ぎ、保育者としての力量を高めることである。そのため、以下の三点に重きを置き、活動をおこなっている。

一つ目は「交流の場」である。卒業生同士、卒業生と教員が気軽に交流できる場を設けて、日頃の保育について語り、情報交換を行うことにより保育者の育ちの場として活用できるようにすることである。

二つ目は、「学びの場」である。卒業生が抱える具体的な課題に焦点をあて、保育者としての育ちを支える場として活用できるようにする。

三つ目は、「相談の場」である。保育に関するさまざまな相談を受け付け、卒業生の保育者としての育ちや就労の継続が可能となるよう支援する場とする。また、転職、再就職の支援等の場として活用し、長く保育者として活躍できるようなサポート体制を整えることである。

コロナウィルス感染拡大に伴い、一時は講師による演習等の実施が困難となったが、昨年度末には少人数で近況や仕事上の悩みを語り合う機会を設けた。

今年度からはコロナウィルス感染拡大前の講義と演習を実施する形に戻し、卒業生からの要望を反映した内容を取り入れた。

(2) 開催日とテーマの概要

実施計画は以下の通りである。

なお、参加者全員に振り返りとして感想とアンケートの記入を促した。

回数	開催日	テーマ・講師名	参加者
第1回	令和6年 8月24日(土) 14:00~16:00	コロナ後の保育と子どもの姿 ～子どもの言葉に着目して～ 講師：星 順子先生	卒業生 8名 教員 6名 計14名
第2回	令和6年 11月17日(日) 10:45~11:45	コミュニケーションワーク 人は人の中で人間として育つ ～心地よい人間関係づくり～ 講師：河田 隆先生	卒業生 15名 中学生 1名 教員 2名 計18名

(3) 実施報告

1) 第1回 令和6年8月24日(土) 開催

テーマ 内 容	テーマ：「コロナ後の保育と子どもの姿 ～子どもの言葉に着目して～」 講座内容としては、①保育者の気になるつぶやき、②子どもにとってのコロナ禍、③写真から語り合おう、④子どものことばについて、⑤子どものことばを引き出すかかわり、⑥子どものことばを引き出す保育環境である。
参加者 の 様 子	<p>新たな環境で働き始めて約5ヶ月が経過した8月に実施することを計画した。特に新人保育者にとっては新年度から数ヶ月が経過し職場の雰囲気慣れた頃であるが、理想と現実のギャップに戸惑いを感じている卒業生も多いと思われる。写真から子どもの姿を肯定的に捉えること、子どものことばを引き出すかかわりや保育環境について学び合った。対象は卒業後3年未満の卒業生とし、安心して近況を語り合うことができるような雰囲気づくりを心がけた。</p> <p>今回の参加者は1年目の保育者4名、2年目の元保育者1名、3年目の保育者4名であった。講師による講義後、グループで写真を用いて子どもの姿や保育環境について語り合った。</p> <p>参加者は、演習を通して日々の保育について振り返るきっかけにもなり、保育者としての成長を垣間見ることができた。保育の仕事離れた卒業生も参加したが、退職前の自分の仕事を振り返り、保育について考えるきっかけにもなったようである。</p>

<p>参加者からの主な意見</p>	<p>1. 講座で学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ことばの認知があっても伝えたい相手がいるか、それにあてはまる保育者であるかという話を聞いた際に少しドキっとした。子どもの気持ちに寄り添い、意見を尊重して話を聞くことを意識しているが、普段からできているか分からないので、ふとした時にでもできるようにしていきたいと改めて思った。 ・子どもの行動を見て、すぐに声をかけるのではなく子どもと同じ行動を試してみたりと子どもが何を楽しんでいるかを把握してみることから始めてみようと思いました。言葉のやり取りをしたいところですが、何を楽しんでいるかを汲み取ることも大切だと学ぶことができました。 ・経験が浅いため、保育を見直したいと思っても自分だけではどうにもならないと思ってしまっていました。保育を見直したいという勇気を持って仕事をしていきたいと思いました。 ・子どもの良い所に目を向けること、子どものかわいい所に目を向けることで保育のやり方が良くなるとわかった。 ・遊びの中に子どものいい所があると実感した。保育中に写真を撮る機会が多いが何気なく撮った写真があとあと見返した際に子どもの姿として印象に残ることがあったことを思い出した。 <p>2. 今後の保育に生かしていきたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもを肯定的にとらえることを意識していきたい。 ・写真を使った研修は昨年1回職場で行ったが、またやってみようと思った。 ・言葉のやりとりの前に子どもの言葉の中や遊びの中から何を楽しんでいるのか、何を保育者や友達に言葉と行動で伝えようとしているのかを理解しようとすることに生かしていきたいと思いました。 ・子どもの興味を引き出したりすることや同じ言葉を繰り返し言語化することを今後行っていけばいいなと感じます。 ・子どものことばについて、保育中になかなか考える時間がなかったので、今日の講義を聞きながら「あの時この子はこんなことを考えて遊んでいたのかな」と振り返る時間になったので、ノートを作り休憩時間に思い返しながらかえていきたいと思った。 <p>3. 取り上げて欲しい内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・関わりにくい、遊びに集中することができない（噛みつきや友達を押し倒す、視線が合わない）子どもの保育の方法。 ・乳児全体への声のかけ方、どのようなことをしたら興味を持ってくれるか。 ・子どもとのかかわり、保護者とのかかわり
-------------------	--

2) 第2回 令和6年11月17日(日)開催

<p>テーマ 内容</p>	<p>コミュニケーションワーク 「人は人の中で人間として育つー心地よい人間関係づくりー」</p>
<p>参加者の様子</p>	<p>卒業生から土曜日以外の開催の要望もあったため、卒業生が多く大学を訪れる大学祭(2日目)に講座を企画した。短期離職の理由として「人間関係」を挙げることもあり、職場ですぐに生かすことができるコミュニケーションワークをテーマとした。参加者の半数が1期生であり、久しぶりに授業を受けたいという思いから参加した者もいたようである。</p> <p>講座内容としては、①コミュニケーションとは、②コミュニケーションワークの基本、③コミュニケーションワークの応用である。</p>
<p>参加者の主な意見</p>	<p>1. 講座で学んだこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育士は笑顔のプロ。子どもたちとの関係性を築いていくことがまずは大切。 ・コミュニケーションの大切さとともに難しさを感じた。表情、笑顔を大切に保育を行っていきたい。 ・仕事やプライベートでも、ノンバーバルコミュニケーションをおろそかにしてしまうので、改めて意識したいです。 ・人に対して嫌な思いをさせたりしない声のかけ方などコミュニケーションの大切さを再度考えさせられました。 ・コミュニケーションワークのお話を久しぶりに聞き、学生時代を思い出しました。 ・活動の導入で楽しく過ごせる環境をつくること。 ・大人も評価されるととてもうれしく思う。子どもたちと接する中で表現に対してなかなか評価の言葉かけが出来ていなかったと思うので、今後意識したいと思った。 <p>2. 今後の保育に生かしていきたいこと</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもに聞いて欲しいことがある時に、メインの話にいきなり持っていくことが多いですが、導入も意識するともっと聞いてくれるのかなと勉強になりました。 ・人間関係で大変なことになっているので職場でも共有し、活かしたい。 ・言語技術を磨いておくこと、子どもの発言を尊重し、拾っていくこと。 ・自分が子ども達に向かって話す時に立ち振るまいを参考にしていきたい。 ・相手のことを理解しようとする事、笑顔で過ごすこと！！ <p>3. 取り上げて欲しい内容について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境について。 ・主体性保育について。 ・私も含め子連れが多いため、実践的な内容の割合が増えると嬉しいです。

(4) リカレント教育実施についての今後の課題

参加者の振り返り時の発言やアンケート内容を見ると、リカレント教育の場は日頃の実践を振り返る学びの場であり、近況を語り合い、悩みを共有し、リフレッシュする場ともなっているようである。

参加者にとってリカレント教育の場は、日頃の保育にすぐ活かせるものだけではなく、日々の保育を振り返ることの大切さ人とこちよい関係を作るために円滑なコミュニケーションの重要性に気づく機会となっているようである。今後も学びを重ね、結果として保育の質の向上につながるよう教職員でリカレント教育を取り組んでいきたい。

現在の課題は、参加者が少数であることである。これまでのリカレント教育不参加の理由として、「土曜保育があり、参加したくても参加できない」「体調不良」などが主であった。今年度は大学祭時の日曜日に開催することで参加しやすい場を作ることができた。交流の場としての機能は引き続き行い、多くの卒業生が参加できるような企画が今後の課題である。引き続き情報収集をおこない、演習を多く取り入れ、職場で活かせるような内容とし、継続して「学びたい」「研究したい」という会への参加意欲を高め、学びを積み重ねられるよう努力していきたい。

リカレント教育に参加しない理由として、「仕事以外はゆっくり休みたい」という声もある。日頃より卒業生が大学に顔を出す機会が多いため、今後も、保育の悩みについて卒業生の語りを聞く時間を設け、リカレント教育の内容について検討していきたい。

公開講座や交流保育、親子遊びの会、Tinyといった活動についても卒業後に在学中の学びの重要性を再確認した卒業生もいるため、公開講座をはじめとする研修や親子遊びの会やTinyへの参加を促すことも必要である。

3. おわりに

卒業生が求めるリカレント教育の内容の充実のためには、卒業生のみならず新人保育者が職務上どのような困難さを抱えているのか、その困難をどう乗り越えていったのかといった保育者としての成長のプロセスを把握する必要がある。

現在、スキルアップ研修の実施など、様々な研修がおこなわれ、保育者の専門性を高めるための取組みがなされている。また、コロナウイルス感染拡大に伴い、オンラインによる研修等も増加し、学びの方法も多様化している。保育に関する知識や技術は、子どもたちとかかわる実践の場で活かされてこそ、保育の専門性につながっていく。保育者養成校としては、保育者養成教育と現職教育を連続したものとしてとらえ、現場と協力し、連携しながら保育者の専門性の向上を目指し、保育の質の向上につながるよう取り組んでいくことが必要である。

卒業生が社会人となり、すぐに「成長し続ける保育者」「反省的実践家としての保育者」になれるわけではない。そこには大学で学んだ知識や技術と職場での実践をつなぐための橋渡しが必要であり、保育現場と協力しながら、卒業生たちが保育者としての専門性を高めていくためのサポートが必要となる。

現在も保育現場の人材不足が続いているが、全国保育士養成協議会では、令和2年度に「保育士養成校における保育士の魅力向上に関する調査研究」として「保育士の魅力向上のための養成校の取組」の好事例を紹介している。その中にも、リカレント教育等卒業支援の項目がある。卒後、継続的に卒業生に働きかけることで卒業生が保育の魅力を確認する機会を作ることなどが書か

れている。

来年度は、公開講座において、保育現場の実践から学ぶ内容を企画している。保育の経験から得た気づきを専門的知識から考察し、更に保育の専門性について学びを深める機会を設けていきたい。またリカレント教育においては対象を広げ、「保育者のためのリカレント教育」として会を実施していくことになった。卒業生に限らず、保育者が継続的に学び直しする機会を作っていくということである。

これからも卒業生同士のみならず保育者の交流や学び合いを大切にし、リカレント教育のあり方を模索していきたい。



VI. 地域産学官連携活動報告

1. 子どもと一緒に脱炭素！幼児期から始めるCN教育

令和6年度 大学コンソーシアムとちぎ 「カーボンニュートラル推進学生地域活動支援事業」

桂 木 奈 巳

1 はじめに

世界的な二酸化炭素排出量の増加は世界規模の気候変動を起こす等の問題となっている。平均気温は上昇を続け¹⁾、台風および線状降水帯の発生頻度の増加等の異常気象が頻発し、生態系への悪影響も出つつある。

2016年に温室効果ガスの削減に取り組むパリ協定が発効され、世界全体で気候変動対策が重要視された。これを機に脱炭素の動きが本格化している。日本においては過去には省エネの取り組みは進んでいたが、原発事故により原子力発電の比率が下がり、火力発電の割合が増加した。さらに、石炭火力発電所の輸出支援をしていたことも加わり、世界の批判を受けるとともに脱炭素の潮流に乗れない状況が続いた。そこで、2020年に政府が「2050年カーボンニュートラル宣言」を行い、国全体でこれを達成する目標を掲げた。同時に「グリーン成長戦略」を発表し、2050年までの脱炭素ロードマップを示した。温暖化対策を「経済成長の機会」と捉える発想の転換を押し出し、経済と環境の好循環を構築することを目的とした。

令和3年に打ち出された「地域脱炭素ロードマップ²⁾」に記載されている炭素削減レベルの要件を満たす取組内容には、地域特性や気候風土に応じて再エネ、省エネ、電化等の組み合わせによる実行が推奨されている。

以上の背景を踏まえ、幼児期から繰り返しカーボンニュートラル（以下、CNと略す）に関する事柄に接することで、将来、地球規模の環境問題を考え、行動を起こせる人材育成に効果的と考えた。本事業では幼児期の子どもを対象にCNを体感できる活動とその効果を検討した。表1に2024年度に実施した事業の状況を示す。

表1 事業の実施状況

月	内 容
7	・ 7 - 8月行事のプログラムの検討、集客と計画、リハーサル ・ 教材（紙芝居）の作成 ・ 7月27日（土）行事開催（紙芝居、ウインドチャーム作り）
8	・ 8月3日（土）行事開催（紙芝居、水鉄砲作り）
9	・ 教材作成のため、再エネルギー利用の場の見学と紙芝居作成
10	・ 教材（11月行事実践用）の作成
11	・ 11月行事のプログラムの検討、集客と計画、リハーサル ・ 教材（水車で発電）の検討 ・ 11月27日（土）行事開催（紙芝居、水車を回そう、木の輪切り工作、植樹）
12	・ 教材（風車で発電）の検討、発電機の改良
1	・ 1月24日（金）：保育実践（風車で発電）

2 紙芝居作成（2種）と読み聞かせ

まず、CNおよびダムに関する紙芝居を作成した。紙芝居は8場面とし、4～5歳児を対象とした。1作目の紙芝居はCNの概要を知る事をねらいとした。登場するキャラクターは子どもが好むウサギ、リス、カメとし、ガイド役をフクロウとした。キャラクターは手描きとし、背景はAIイラストにより生成させ、キャラクターと背景を合成した。なお、使用ソフトは著作権完全フリーであるAdobe社fireflyを使用した。表2に作成した紙芝居の概要を示す。

脚本作成時においては、CO₂の扱いが課題となった。子どもにとって、目に見えないものは理解しにくい。加えて、CO₂の学習も小学校高学年で行うことから、ここでは私たちの体から出るものであること、悪さをすることもあるが、全てが悪いわけではないことを伝えるにとどめた。

2作目の紙芝居は、栃木県が多く有するダムを取り上げ、再生可能エネルギーに触れることをねらいとした。内容は実際に鬼怒川ダムを見学し、その資料室等を訪問し、素材等を収集して検討した。紙芝居に登場させたキャラクターは1作目と同じとしてシリーズものであることを意識し、ガイド役はツバメとした。概要を表3に示す。ここで取り上げた「発電」の仕組みについては、水の力で水車が回り、電気が作られる（電球が点灯する）という簡単な内容にとどめた。

作成した2種の紙芝居は、次に続く実践の導入として読み聞かせを行った（表4）。参加者は予想以上にしっかり聞いていた。また、2作目の方が参加者には理解しやすい様子であった。

表2 紙芝居「みんなで地球を守ろう」（CNの概要）

<p>あらすじ：森の異変に気づいた動物たち。フクロウから地球温暖化やCNのことを聞く。深刻な状況を理解した動物たちが、自分たちでできる取り組みを続けると、再び森が元気になっていく。</p>		
		
1枚目：表紙	2枚目：フクロウに相談	3枚目：地球温暖化
		
4枚目：二酸化炭素	6枚目：動物たちのとりくみ	8枚目：未来への約束

表3 紙芝居「ダムのお仕事」(再生可能エネルギーについて)

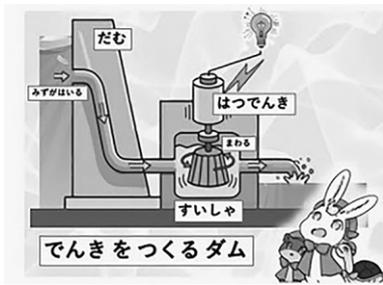
<p>あらすじ：川で不思議なものを見つけた動物たち。旅のツバメが飛んできて、ダムの役割を紹介。ダムは生活を守ってくれるだけでなく、電気も作れ、生物の多様性にも関係していることを教えてもらう。</p>		
		
1枚目：表紙	2枚目：ふしぎなものを発見	3枚目：ダムのお仕事
		
4枚目：みんなを守るダム	5枚目：電気もつくれるダム	7枚目：みんなのダム

表4 紙芝居読み聞かせの様子



「みんなでちきゅうをまもろう」注1



「ダムのおしごと」注2

3 子ども向け再生可能エネルギーを体感できる教材開発と実践

本提案の対象である幼児期の子どもに、遊びを通して再生可能エネルギーの存在を知らせることを目的として実施した。

再生可能エネルギーには、非化石エネルギー源として太陽光、風力、水力、地熱、太陽光、バイオマスなどが挙げられるが、このうち、子どもの遊びに関連付けやすいのは「水力」「風力」である。水力と直結するのは水車のおもちゃであり、牛乳パック等で製作した水車に水をあてて回す活動は保育の現場でも取り入れられている。また、風力と直結するのは「風車」で自作の風車に風を当てて回す遊びもある。この時に、水車や風車に発電機を取り付け、「発電」を体験す

ることも可能であろう。よって、遊びを通して水車や風車が我々の暮らしに必須である「電力」に役立っている事実に繋げることが可能と考えた。そこで、子どもが製作可能な水車や風車に、モーターを取り付け発電させ、電球を点灯させる教材の検討を行った。

3-1 発電部の検討と水車の試作と検討

作成する水車・風車に共通して使える発電確認装置を設計した。市販モーター各種とLED各種の組み合わせを探り、軽い力で電球を点灯できる組み合わせを実践に用いた。選択した電球は省電力で点灯するLEDタイプを採用したが、この点灯には2V以上の電圧が必要である。簡易の水車を発電させる直流モーターに取り付けて水流で回転させたときの電圧をマルチテスターで測定し、点灯に必要な2V以上を生成できるモーターを採用した。具体的には、ケニス(株)製の高性能発電用モーターSMで、これに水車・風車接続用キャップとLED(赤と緑、5mm、砲弾型)を取り付け、発電確認用装置とした。

水車は牛乳パックとPETボトルで製作し、これに発電確認用装置を取り付け、点灯するか否かを確かめた。牛乳パック水車の利点は、製作時に子どもの力で材料をハサミで切って作ることが可能で、自分の力で一から製作することができるため、達成感が得られる。欠点は水圧に耐えられるように羽部分を丈夫にする必要があるため、重くなる。これにより回転の際に負荷がかかり、発電確認用装置との結合がより不安定になる。一方、PETボトルで製作した水車の利点は軽量で耐水性がある点である。欠点は材料が硬く子どもが自力で加工することが困難な点である。

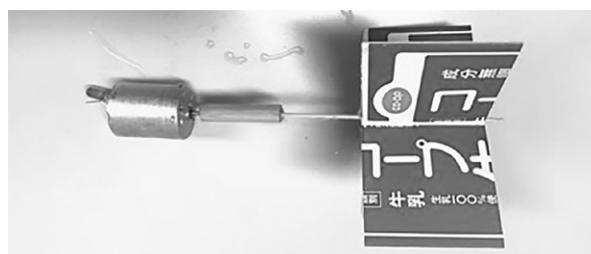
最終的には子どもが作りやすく、効率的に発電できる形状として、表5に示すPETボトルを使用したタイプに落ち着いた。羽部分は円筒状のペットボトルのカーブを利用し、水の力を効率的に受けられるように工夫した。

発電確認用装置は自作した水車・風車とモーター部の接続部分の不安定さに課題がある。さらにLED電球を点灯させるためには、その順方向に水車や風車を回転させる必要があり、子どもによる製作活動の際に配慮が必要であるため、今後も改良を重ねたい。

表5 発電部と水車の試作



発電確認用装置 (高性能モーター+LED電球)



牛乳パックの水車+モーター (不採用)



採用した水車



水流を受け、電球が点灯する

3-2 水車を作ろう（実践）

水車を製作し、発電を体験する活動は本学で開催した行事内で行った^{注3}。表6にその様子を示す。この時には、鬼怒川ダムの模型を展示し、説明用パネル2種（CO₂と水力発電）を掲示した。水車の製作および発電体験はあらかじめ切ったペットボトルに、羽を貼り付けてもらい、これに発電確認用装置を取り付け、ホースの水に水車を当てて発電させる方式とした。子どもたちは、水車を自分で持ち、水を当てて光ったことに歓声を上げる子どももいれば、他の人に水車を持ってもらい、光ったことを確認する様子の子もいた。参加した保護者が子どもにダム発電の仕組みを伝える様子も見られた。さらに「(家で) お風呂で遊びたい」「別の形を作りたい」と発言する子どもが大半で、自作の水車が発電につながり、電球が点灯することに関心を示していた。

表6 「水車を回そう」実践の様子^{注3}



製作の様子



水車を回すところ

3-3 風車で遊ぼう

風車の製作では、PETボトルや紙皿、紙コップを用いて製作し、電球が点灯するタイプ数種を得た。表7は試作した風車と電球の点灯を確認する様子を示す。最終的には保育現場で多用されている紙皿で製作できる風車を実践に用いた。実践は本学で行われた市内保育施設との交流保育^{注4}で行った。表8は実践の様子である。まずは学生が風車で遊ぶ姿を見せて、子どもが反応する様子を観察しつつ進めた。子どもの興味関心の対象は様々であったが、表9には子どもが回転のエネルギーや発電に気づく場面と仕組みに関心を寄せる子どもの姿を抜粋した。科学の視点を持つ子どもは、「走ると光る」「早く走ると強く光る」ことを言葉に出して表現できており、仕組みに興味を示す子どもは、風車を回すと光ることに対し、自分なりに発電の仕組みを理解しようとする姿が見られた。このような「探究・探索」の心が科学的思考の芽生えにつながると思われ、CN理解への大切な一歩となることが期待される。さらに、自分の発見を友だちに伝え、遊びに誘う場面もみられた。この例のように科学の視点を持つ子どもの発言が別の子どもの刺激となり、CNに関する体験・気づきが周囲に伝播する効果も期待できる。

表7 風車の試作



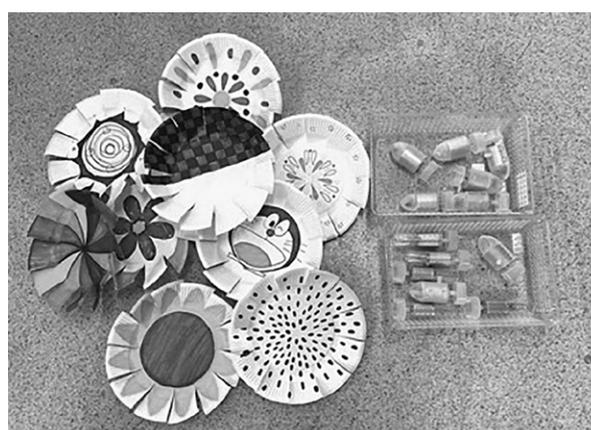
試作した風車の一部（全て電球は点灯する）



PETボトル風車を回し電球点灯を確認



走って電球を点灯させる



用意した風車と発電確認用装置

表8 「風車を回そう」実践の様子^{注4}



仕組みに興味を持つ子ども



子どもと学生が並走する

表9 子どもが風車で遊ぶ場面の観察の一部（学生の記録）

発電に気づいている子どもの様子

しくみに興味を持つ子どもの様子

遊び始めからしばらく経った頃

風車へ「なにこれ！」と興味津々に近づいてくる。「やるー！」と風車を持つと、おもむろに走り出す。「回ってる！」歓喜の声を上げながら走り続ける。視線は風車を裏側から見ており、風車の模様や光ることには気づいていない様子である。3年生が子どもに並走し、光るところを示すと、自分の風車も光ることに気づく。手元を眺め「光ってる！」と嬉しそうに叫び、しばらくの間走り続ける。

並走する 学生の風車を見て光る部分に気づき、自らの風車も光らせようとする。しかし、光る部分を握りしめているため、走りながら光る部分を見ることは難しい。その後、女兒は光ることよりも、走って風車を回すことを楽しんでいる様子である。

学生と共に、風車を持って走り続ける男児。学生は「光ってるよ、光ってる！」と楽しそうに伝える。男児はモーターの光る部分を目を輝かせて眺めながら、黙々とアリーナを数周走り続ける。

走った後に男児が「もっと早く走ったら強く光るかな？」というつぶやきをしていた。

「何それ〜？」と声をかけてきた友達に、手で羽を回して見せ、「ここが回って、いっぱい回すと光るんだよ」と説明をした。「これ、(貸して)あげるからやってみな！もう一個持ってきて一緒に走ろ！」と言い、一緒に遊び始めた。

風車を見て「どうなってるの？」「どうやって作るの？」と仕組みを知りたがる子がいた。

キャップの部分を見たり手で風車を回したりしていた。赤い電球を見て「光るの？」と呟いた。

少し落ち着いた頃

風車で遊ぶ学生を無言で見つめる男児。風車を手に持つと、笑顔で走り出す。突然立ち止まり、真剣な表情で風車を指で回し続ける。走ると光ることを伝えるが、指で回すことが面白く夢中で回し続けている。

「さっき、めっちゃ光ってた！」学生を振り切り、叫びながら走り去る男児。走りながらもじっと手元を見ている。光るたびに笑みを浮かべ、再び叫ぶ。

「走りながらジャンプしたら光り方変わるかな？」と呟きながら一生懸命跳ねる男児。

友達とどちらが早く走れるか、電球をつけることができるかと競争をする姿があった。

4 CNを体感できるプログラムの考案と実践

CNを体感できるプログラムとして、表10～13に示す実践を行った。表10の「ウインドチャーム^{注1}」および表11の「竹の水鉄砲^{注2}」は夏場の省エネルギー対策の一例として提案し、同時に涼を取ることも可能である。製作の前には、表2に示した紙芝居の読み聞かせを行った。

ウインドチャームの製作では、主に保護者が木製リングにカピス貝を結びつけ、子どもは貝を貼る等の装飾を担当している様子であった。完成後は、参加者は自作のウインドチャームを揺らして涼しげな音を出して楽しんでいた。

竹の水鉄砲に使用した竹の一部は学内子どもの森から切り出し、不足分は購入した。完成後はグラウンドで自由に遊んでもらった。子どもたちは竹の水鉄砲を使う事は初めての体験だったので、簡易プール等に汲んだ水を吸い上げて出す動作に慣れない子どももいた。次第に要領が分かってくると、「的」役の学生に水を当てて楽しむ様子が見られた。

「木の輪切りを使った製作活動」ではCO₂固定の大切さを伝えることを目的とした。実際には、本体験で使う木材は少なく、CO₂固定にもほとんど用をなさないが、ここでは考え方を伝える導入という位置付けで取り上げた。使用した木材は子どもの森から切り出した枝を丸鋸でカットして作成した。木の実にはあらかじめ採取しておき、種類別にわけ、その名称を添えた。約20種の木の実類を用意し、材料はボンドとグルーガンで貼り付けた。製作場所の近くに、CO₂固定に関するパネルを設置した（表12）。

CNを実現する方法の一つに、CO₂吸収量を増やす「植樹」が挙げられる。植樹を通して自らがCN対策に貢献しているという意識づけを行うことを目的とした。表13にはその様子を示す。用意した樹木の苗は林内で通常みられる種や、子どもが興味を示すと思われる種とした。1家族につき、1本を選んでもらい、穴を掘って植えてもらった。作業中は「この木がどうなったか見に来よう」「大きく育つといいね」等の会話があった。また、設置したパネルの内容を受けて、保護者が「木を植えると地球が元気になるんだって」「二酸化炭素ってね・・・」と話す様子も見られた。

表10 ウインドチャーム作り^{注1}



表11 竹の水鉄砲作り^{注3}



製作の様子



水鉄砲で遊ぶ

表12 木の工作^{注3}

きでこうさく (工作)

いえやおもちゃをきでつくと、ちきゅうをたすけてくれるんだ。きはおおきくなるまでにたくさんの「にさんかたんそ」をすいこんでいるから、そのきをつかったものは、「にさんかたんそ」をそのままとじこめておけるんだ。そして、あたらしいきをうえれば、また「くうき」をきれいにしてくれるよ！だからきをつかうと、ちきゅうをまもってくれるんだ。



木工とCN 解説パネル



輪切りを使った工作

表13 植樹^{注3}

きをうえよう (植樹)

きをうえると、ちきゅうがげんきになるんだ。くるまやこうじょうからでる「にさんかたんそ」がたくさんあると、ちきゅうがあつくなって、たいへんなことになっちゃうんだ。でも、きはその「にさんかたんそ」をすって、かわりにきれいな「くうき」をつくってくれるんだ！だから、きをたくさんうえると、ちきゅうがすずしくてすごしやすくなるんだよ。



植樹とCN 解説パネル



植樹の様子

5 おわりに

本事業では、幼児期の子どもを対象としたCN教育について検討を行ってきた。幼児期の子どもにはCNに関する事項の原理等を理解することはできない。しかし、幼児期は様々な体験を「ためこむ」時期である。ためこんだ事象が将来、何かを学んだ際の補助線となり、理解が一気に進み、考えが深まる事が多々ある。

本事業はこのような子どもの特性を踏まえて展開した。今回は子どもの活動に添うCNを意識した教材を検討したが、単に教材を与えて遊ばせるだけでは期待する効果（CNへの気づき等）が十分に得られないこともわかった。風車の実践に見られるように、CN理解の目的意識を持つ大人（保育者）が、子どもの様子をよく観察して反応をみながら進めることで、「子どもに押し付けすぎない関わり方」が可能となり、子どもの自発的な遊びを誘発したといえる。これにより子どもが自ら「発電する風車」という対象に好奇心・探究心を持ち、自分の考えを深めようとする様子的一端が見られた。これはCN理解の点においても理想的な形であったといえる。

6 今後の課題について

今回作成した教材類を改良し、引き続き子どもの活動に取り入れたい。さらに子どもの活動に無理なく取り入れられる教材類を増やしたい。子どもの興味関心の対象は様々であることから、CNに関する多様な教材と触れ合う場を設けることで、そのいずれかに心が惹かれ、CNへの理解と貢献への芽生えが促されるだろう。本事業で取り上げた内容は繰り返し体験することで効果を発揮するため、継続して行いたい。

子どものCN理解の土台を育むには、その事象に出会った際に子ども自らの好奇心が刺激されることが最重要であり、それには子どもに寄り添い丁寧な関わりができる大人の存在が欠かせないことが確認された。よって、子ども対象のCN教育を進めるには、大人側のCNに対する理解や意識改革も必須であろう。

注1 環境学習センター主催「親子で自然体験in環境学習センター」2024.7.26.（土）開催、参加者50名

注2 NPOうつのみや環境行動フォーラム主催「親子ネイチャーフィーリング事業（宇都宮共和大学）」2024.8.3.（土）開催、参加者33名

注3 NPOうつのみや環境行動フォーラム主催「親子ネイチャーフィーリング事業（宇都宮共和大学）」2024.11.23.（土）開催、参加者34名

注4 本学子ども生活学部学生（1年生）と市内認定子ども園との交流保育（宇都宮共和大学）、2025.1.24.（土）に実施、年中児約90名参加

引用文献

- 1) 気象庁, 世界の年平均気温, 2023, https://www.data.jma.go.jp/cpdinfo/temp/an_wld.html
- 2) 環境省, 地域脱炭素ロードマップ, 2021, [https://www.env.go.jp/earth/②地域脱炭素ロードマップ\(概要\).pdf](https://www.env.go.jp/earth/②地域脱炭素ロードマップ(概要).pdf)

2. 大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」

子ども生活学部 専任講師 小野 貴之
教授 杉本 太平

1. 活動の趣旨

令和6年度は、「地域で繋がる新しい出会い」を目標として、地域の子育て支援サークルとの連携をさらに深め、人と人との繋がりを起点に、子育て支援のネットワークをより広げていく試みを継続して実践した。また、保育者養成の大学として、地域における子育て支援の一翼をどのように担うべきかについて、子育てサークルとの協働活動を通じて、学生と共に考えを深めていった。

2. 活動の実績

今年度の親子遊びの会の活動のうち、大学地域連携活動支援事業に関わる活動を表1に示す。

表1 令和6（2024）年度の栃木県大学地域連携活動支援事業活動実績

事業名	事業の実施内容	事業の成果
「七夕の会」	7月6日（土）本学保育実習室講義室でイベントを開催。親子が共に遊ぶ内容を盛り込むとともに、親同士が教員を交えて語り合う時間を持った。3つのコーナー（絵具で大きな紙やダンボールハウスに絵を描く、ダンボールタワー、魚釣り）を中心に、子どもと保護者、学生で遊び活動を行い、後半は子どもと一緒に七夕の短冊に願い事を書き、「たなばたさま」の歌を歌った。	親7名、子10名、学生17名、教員3名 合計37名 子どもだけでなく保護者の方々同士でたくさん話をして交流する様子が見られた。保護者の方々からは「子どもたちが普段はあまりできない遊びを楽しそうに遊ぶ姿を見ることができて良かったです」「夢を持っている学生さん達が一生懸命笑顔で接してくれて子どもが嬉しそうでした」「コロナ禍であまりイベントに行けなかったのも、また参加したいと思います」「活動の時間が2時間くらいあると嬉しい」等の感想をいただいた。子ども、保護者、学生の関りが活発に行われており子育て支援の場作りの意義があることを感じた。
勉強会「保護者支援について」	8月24日（土）本学5号館401教室にて勉強会を開催。保育園、とちぎ多胎ネット、Kodomomフィットネスの講師をお招きし、保護者との関係性の築き方、保護者支援の実践例、保護者からの相談への対応等について具体的な経験からお話いただいた。	学生が地域連携活動を行う中で、保護者とどのように交流することが重要であるかを考える貴重な機会となったと思われる。講師の方からは、保育者および保護者の視点から、学生が行う地域連携活動の意義や保護者が保育者に求めていることについてご講演いただいた。これにより、学生たちは保護者への実際の関わり方を含め、さまざまな観点から保護者支援を考えることができたのではないと思われる。

		<p>今後の「親子遊びの会」の活動を考える上で、学生たちは子どもだけでなく、保護者との関わりについても重要な視点を得ることができたと感じた。</p>
活動に向けての打ち合わせ	<p>10月23日（水）本学にて、学生代表と子育てサークルの代表者、教員での打ち合わせを行った。</p>	<p>11月9日（土）の親子フィットネスイベントに向けた打ち合わせを行うとともに子育て期の親のニーズのヒヤリングも行うことができた。地域の子育てサークルとの繋がりが生まれた。</p>
（地域への報告）大学コンソーシアム発表	<p>大学コンソーシアムとちぎ主催学生発表コンテスト「学生&企業研究発表会」で本会の活動を発表。</p>	<p>親子遊びの会の取り組みを地域に発信することのできる機会となった。「鹿沼相互信用金庫理事長賞」表彰</p>
「親子フィットネス」	<p>11月9日（土）本学アリーナにてイベントを開催。地域連携事業の連携団体のとちぎ多胎ネット、Kodomomフィットネスの方々と協働し、スタジオHappy Smileピラティスインストラクター、フリーインストラクターの講師をお招きして親子フィットネスを行った。</p>	<p>親10名 子11名 学生22名、 教員2名 合計45名</p> <p>活動は未就園の子どもたちが大勢参加され、大盛況となった。保護者の方からは、「学生さん達が明るく接してくれて良かったです。子どもも楽しく過ごせて嬉しそうでした」「ゆっくりと体を動かせてリフレッシュできました」との感想をいただいた。交流を通して子育て中の方の声を聞く貴重な機会、また地域の方に学生の真摯な姿を知っていただくよい機会になったと考える。また、今回は親子で行うフィットネスだけでなく保護者向けのフィットネスを行った。その間は、子ども達は親と分化して学生達との遊び活動を実施した。活動を通して、学生は親子のふれあいをねらいとした運動遊びや、遊びの環境、安全に配慮して活動を行うための留意点等、様々なことを学ぶことができたのではないかと思われる。</p>
「クリスマスマーケット」	<p>12月7日（土）7字都宮共和大学シティキャンパスにて開催されたクリスマスマーケットで、親子でクリスマスを楽しめる場を提供することを意義とし、絵本や紙芝居の読み聞かせなどを行った。また、クリスマスカードなどの制作活動も実施した。</p>	<p>地域の親子10数組（自由参加） 学生5名 教員1名</p> <p>参加した子ども達は、絵本や紙芝居を楽しんでいた。学生は地域で生活する親子との交流やクリスマス（季節の行事）を通しての表現・制作活動を通して、保育実践力の向上につながる体験が得られたと思われる。</p>

「お正月遊び」	12月15日（日）地域コミュニティ施設ミナテラスとちぎにて「お正月遊び」イベントを開催。お正月の飾りや凧など身近な素材を使って親子で楽しむ手づくりコーナー、段ボールでできた臼と杵を使ってみんなでお餅つき、など学生が計画し、実践した。	親20名 子16名 学生8名 教員3名 合計47名 保護者の方からは、「なかなかはさみをうまく使えない子どもに対して優しく教えていただけて助かりました」「子ども目線で一つ一つの動きの説明をしてくれたので、子どもがとても楽しそうでした」「子どもや大人が沢山いる中で話したりするのは緊張するとは思いますが、皆さん素晴らしいので恥ずかしがらず自信を持って手遊び歌や説明をしてもらえたらと思います」との感想をいただいた。4年生が引退し、3年生・1年生主体となる初めての活動として、意識の向上が見られた。
成果報告書作成	令和6年度の会の計画や実績を記録し、次年度以降に続ける際の資料となる内容とした。	90部作製

3. 連携先

○特定非営利活動法人とちぎ多胎ネット

南部 裕子

○Kodomomフィットネス

武内 麻衣

4. 成果目標に対する達成状況

親子遊びの会のイベントを7月6日、11月9日、12月15日の3回開催することができた。そのうち1回はとちぎ多胎ネット・Kodomomフィットネスとの協働イベントを実現することができた。

イベント当日だけでなく準備段階から、ボランティア登録学生は企画・運営・会場設営など多岐にわたる活動に主体的に取り組んだ。学生同士で意見を出し合い、改善や工夫を重ねながら、子どもや保護者と関わる実践的な学びを深めた。子どもの発達に応じた遊びの工夫や保護者との関わり、運営スキルを身につける中で、保育者としての力を養うとともに、地域における子育て支援の意義への理解も深まった。大学地域連携活動支援事業を通じて、自らの学びに対する自信や意欲が育まれ、新たな地域連携の可能性も見出された。

5. 実施した内容

本事業の内容の一部を成果報告会における発表内容を報告する。

(1) 大学地域連携活動支援事業成果報告会

期 日 令和7年2月4日

場 所 栃木県庁東館4階講堂

発表者 秋野詩織、大貫陽香、小林歩未、満田萌、村上芽唯

大学における子育て支援 —地域で繋がる新しい出会い—

宇都宮共和大学 子ども生活学部

秋野詩織 大貫陽香 小林歩未
満田萌 村上芽唯

発表の流れ・目次

1. 親子遊びの会の意義と目的
2. 親子遊びの会の活動と2024年度の活動方針
3. 本事業の取り組み
4. これまでの活動報告
5. 気づきおよび今後取り組みたいこと

親子遊びの会とは

- 参加者は、**地域の子育て家庭**であり、子どもの年齢は主に0歳～6歳としている。
- 活動は、親子で過ごす時間、保護者と教員の懇談、子どもの遊びの時間で構成される。
- 学生は、**自主的に参加している1年生～4年生**である。
- 学生は、親子で過ごす時間には活動のテーマを設け、**活動の計画と準備、当日の運営、遊びの支援**を行う。

親子遊びの会の意義と目的

子育て支援
研究センター

親子遊びの会

子どもの遊びの支援
親子関係の支援
子ども・家族同士の繋がり
作り支援

教員のサポートのもと、学生スタッフが主体的に運営に携わり、子どもと子どもと保護者への関与も経験できることで、学生の保育実践力やコミュニケーション能力などの養成に繋げることが可能

2024年度の活動方針

- ・2024年度は、新たな活動目標を『地域で繋がる新しい出会い』をテーマに、地域の子育て支援団体・サークルなどとも連携し、地域の子育て支援ニーズを掘り起こしつつ、本学が地域の子育て支援の拠点のひとつとして役割機能を充実させることを目指す。
- ・地域連携を通して新たなネットワークを構築し、地域との関係を強化することで、栃木県の「笑顔輝く子ども・子育て支援プロジェクト」の一助になるものと期待できる。

2024年度の活動

1. 7/6 親子イベント「七夕の会」
2. 8/24 親子遊びの会 特別研修「保護者 支援について」
3. 11/9 親子イベント「親子フィットネス」
4. 12/7 クリスマスマーケット
5. 12/15 親子イベント「お正月遊び」

1. 「親子フィットネス」実施



親子フィットネス① 親子でフィットネス

フィットネスのコーチを中心に保護者、子ども、学生とコミュニケーションを取り、たくさん体を動かし楽しんでいる姿が見られた



親子フィットネス② サーキット遊び

マットや、フラフープ、トンネル、跳び箱、巧技台などを使い円になるように配置し、安全面を配慮しながら子どもたちが伸び伸びとたくさん体を動かせるような環境を構成した



親子フィットネス③ 保護者向けフィットネス

最初は子どもと離れることから、気にかけてながら行っている保護者の方がいたが、学生が子どもたちと関わっていたことで、保護者だけの時間をサポートできたのではないかと思う



親子フィットネス④ 子どもの遊びコーナー

遊びコーナーで子どもたちが遊べるよう環境を設定した
コーナーで遊ぶことによって緊張がほぐれる様子も見られ、安心して遊べる環境があることで、子どもたちの遊びの発展につながると感じた



親子フィットネス⑤ 子どもの遊びコーナー

コーナーを設定した事で、子どもたちは夢中になって遊ぶことができ、保護者の方々にも十分にフィットネスを経験して体を動かせる機会を作ることができたと思う



親子フィットネス⑥ 活動を通して

遊びと遊びの間隔を広めに設定することで保護者が子どもの遊びを見守りやすく、安全面に配慮することができる



子どもと保護者が安心してフィットネスを行うことができた



2. 「お正月遊び」実施



お正月遊び① 準備



お正月遊び② 餅つきごっこ

最初に場所に慣れ、緊張がほぐれるよう餅つきごっこを行った



お正月遊び③ 身近なものでだるま落とし

子どもたちはダイナミックに体を動かし、周りの保護者の方々は、子どもが遊びに取り組みるように協力する姿が見られた



お正月遊び④ 凧作り

子どもたちは自分の好きな凧を選び、絵を書いたり、ハサミで切ったり、集中して制作していた

制作後は、作った凧を嬉しそうに飛ばす姿も見られた



お正月遊び⑤ けん玉作り

制作後は作ったけん玉で遊び、紙コップに入れることに何度も挑戦している姿が見られた



お正月遊び⑥ お正月の絵本、ペープサート

活動の最後にはお正月を題材とした絵本・ペープサートを行った

読み聞かせでは「だるまさんが」「おもちゃ」を読み、絵本ならではの繰り返しを楽しんでいた



お正月遊び⑦ 活動を通して

- ・部屋をお正月飾りや干支であるへびを飾ることで子どもたちが興味を持ちながら活動に入ることができた
- ・活動の順番を見直した結果、子どもたちの緊張がほぐれ、遊びを自分なりに楽しむ様子が見られた



3. 「クリスマスマーケット」に参加



2024年度後半までの活動からの気づき

1. 宇都宮共和大学のキャンパス以外の様々な場所で活動を行うことで、支援の幅を広げることができる
2. 季節による活動は参加者にとって身近なものであり、地域の人とイベントを通して関わることで季節に触れる大切さや親しみを持ちイベントに参加することで様々な交流を増やすことができる
3. 子育て支援に関する専門職の方々との連携を図ることが重要性である

今後取り組みたいこと

1. 活動を開催するにあたって、広報活動に力を入れ、より多くの親子に参加していただけるよう努める
2. 他学部・他学科と連携して、子どもとの交流の機会を充実させる
3. 参加された保護者の方々からの感想や意見を共有し、意見交換を通じて共通の理解を図る

ご清聴ありがとうございました。

宇都宮共和大学 親子遊びの会

6. おわりに

子どもと保護者がさらに深く関わり合えるよう、今年度も多様な地域連携活動を展開することができた。子どもにとって豊かな体験の場を提供するだけでなく、保護者同士が交流し、情報を共有できる場としても機能した。

学生は活動の企画・運営・振り返りに熱心に取り組み、地域の子育て支援への理解を深めるとともに、子どもの姿から学ぶ姿勢を育み、保育者としての実践力を高める貴重な学びの機会となった。

令和6年度栃木県大学地域連携支援事業「親子遊びの会」メンバー

大学名	学部・学科	学年	氏名	
宇都宮共和大学	子ども生活学部 子ども生活学科	4年	1	竹尾 毬 愛
			2	西川 綺 華
			3	根本 桃 華
		3年	4	秋野 詩 織
			5	大貫 陽 香
			6	小林 歩 未
			7	満田 萌
			8	村上 芽 唯
		1年	9	清水 亜 海
			10	田野實 伊 吹
			11	黒尾 羽衣音
			12	佐藤 初 音
			13	田村 真 也
			14	金子 暖 奈
			15	岡部 天 音
			16	坂本 乃々華
			17	佐藤 有 純
			18	戸辺 龍
			19	中山 怜 那

3. 大学コンソーシアムとちぎ第21回学生&企業研究発表報告

大学における子育て支援 —地域で繋がる新しい出会い—

宇都宮共和大学子ども生活学部「親子遊びの会」3年
秋野 詩織、大貫 陽香、小林 歩未、満田 萌、村上 芽唯

【概要】 宇都宮共和大学子ども生活学部における子育て支援活動「親子遊びの会」の実践研究について報告する。親子が楽しめるイベントの改善をくり返すなかで、①親子ともに充実する支援内容、②子どもの自己表現を促す活動、③安心できる受容的な働きかけが重要であることが見出された。また、活動の提供が、学生にとって保育実践の学びとしての意義があることが分かった。

【栃木を元気にするには】 宇都宮市のKodomomフィットネス、小山市のとちぎ多胎ネットと連携し、保護者や子どものニーズを学ぶ→子育てサークルの保護者と遊びのプログラムを開発する→親子がともに笑顔で楽しむ・子どもと学生が遊ぶ間安心して相談ができる→活動を通して学生は環境構成、教材研究、子どもの援助を学ぶ→実践力をつけて保育者として現場に出ることができ、地域の親子に還元できる。また、子育てサークルなど地域交流を強化し本大学が保護者にとって憩いの場になる。この循環が地域の子ども・保護者・保育者から栃木を元気にすると考える。

1. 「親子遊びの会」の意義と目的

宇都宮共和大学「子育て支援研究センター」事業のひとつである「親子遊びの会」（以後、本会）では、子どもの遊びの支援、親子関係の支援、家族同士の繋がり作り支援を目的にさまざまな遊び・活動を行っている。本会は、教員のサポートや助言をもとに、学生スタッフが主体的に活動スケジュールや環境構成、制作等に携わり、実際の運営も行い、直接、子どもと保護者への関与も経験できることで、学生の保育実践力やコミュニケーション能力などの養成に繋げることも、本会の目的となっている。

2. 本会の概要

参加者は、地域の子育て家庭であり、子どもの年齢は主に0歳～6歳である。活動は、親子で過ごす時間、保護者と教員の懇談、子どもの遊びの時間で構成される。親子で過ごす時間には活動のテーマを設け、学生は活動の計画と準備、当日の運営、遊びの支援を行う。学生は、自主的に参加している1年生～4年生である。

3. 昨年度活動実績

昨年度の活動実績は、右の通りである。

第1回 7/6 親子イベント「七夕の会」

場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス

第2回 11/9 親子イベント「親子フィットネス」

場所：宇都宮共和大学長坂キャンパス

第3回 12/15 親子イベント「お正月遊び」

場所：ミナテラス

4. 本研究の目的

本会では、毎活動の満足度が高いことから、リピーター率が高い。子育て支援に求められるニーズの変化や地域との連携が薄れているよう思われ、本研究では以下の目的を設定した。

- ①子育てサークルと連携し、保護者と子どものニーズがどのように変化しているのかを知る。
- ②親子のニーズに適した活動を運営するための方法を開発する。
- ③子どもが主体的に遊び、親子で楽しむために、学生が行うべき援助、配慮とはどのようなものかを検討する。

この3つの目的について、プログラムの検討、教材研究及び実践と省察により明らかにする。

5. 方法

(1) 子育てサークルとの連携

2024年度の活動テーマを『地域で繋がる新しい出会い』とし、地域の子育て支援団体・サークルなどとも連携し、地域の子育て支援ニーズを掘り起こしつつ、本学が地域の子育て支援の拠点のひとつとして役割機能を充実せることを目指している。具体的には、昨年度連携した宇都宮市の子育てサークル『Kodomomフィットネス』に加えて、新たに小山市の子育てサークル『とちぎ多胎ネット』と連携し、共同研修を重ね、地域のニーズに適した活動、環境構成、教材などを検討し、親子が主体的に参加し、楽しめることを目標としたイベントを計画・実施する。

(2) 実践

今年度は3回の親子イベントを計画・実施する①7/6「七夕の会」②11/9「親子フィットネス」③12/15「お正月遊び」である。また、地域子育てサークルの保護者と共同会議や共同研修（8/24）を行う。

(3) 省察

活動後に毎回ミーティングを行い、学生、教員が実践について検討・考察を行った。

6. 結果

(1) 第1回活動実践

ここでは5月の活動について報告する。第1回の活動のテーマは、『七夕の会』であった。製作や、遊びなど自由にできるコーナーを魚釣りコーナー、積み重ねコーナー、お絵描きコーナーと3つでわけて活動することや、七夕の短冊作成や歌を歌う等の活動を行った。

a. 魚釣りコーナー

魚釣りコーナーでは、竿を使い魚釣りができる場所と、自分で浮かべたい魚を作る製作の場所を設けた。魚釣りでは、プールの中の魚が無くなるまでとる姿や、取れた魚が嬉しく保護者に見せる姿があった。魚製作では、牛乳パックに子どもたちが好きな魚を書いたりシールを貼ったり色を塗ったりしている様子が見られた。

b. ダンボールや紙コップ等、日常にある物を積み重ねて遊ぶ

紙コップやダンボールを積み重ねたり、崩したりして遊んだ。最初は緊張からか少し遠慮している姿があったが、徐々に慣れ



(写真1) 段ボール崩し

てきたのか自分の身長よりも高く積み上げたり、ダイナミックに崩すことを楽しんでいる姿が見られた。子どもたちと同じ目線に立ち遊んでいくなかで、日常にあるものを使って遊ぶことの楽しさを一緒に感じる事ができたと思う。

c. お絵描きコーナー

3色のロール紙を繋げ七夕をモチーフにした大きな紙とダンボールの家コーナーを作り、絵を描いて楽しめる場を設けた。始めは保護者と一緒に絵を描く姿が見られた。細筆、太筆を使い様々な絵を描くことや、タンポを使って色を付けていること、色を付ける感触を楽しんでいるようだった。ダンボールの家では黙々とシールを貼る子、自分の思いを子ども同士で伝え合いながら遊んでいる子どもの姿が見られた。

d. 短冊作り

お絵描きの延長で短冊に絵を描く子ども、シールで飾り付ける子ども、「お母さんになりたい」という願いをひらがな表を見ながら夢中になって書いている姿があった。書いた短冊を保護者に見せに行く姿も見られ、主体的に活動している様子が見られた。帰る際に願い事を書いた短冊を付けた笹をプレゼントすると、子どもたちはとても喜んでた。



(写真2) 巧技台

(2) 保育者や子育てサークルとの共同研修

学生が保護者とより円滑関わるができることや、新たな運営方法の可能性を探ることをねらいとし、「わかな保育園」「とちぎ多胎ネット」「Kodomomフィットネス」の方々と保護者との関係性の築き方、保護者支援の実践例、保護者からの相談への対応等に関する研修を行った。(写真3) (8/24)。

『保護者支援について』：8月24日(土)に「わかな保育園」平野由起子先生、「とちぎ多胎ネット」南部裕子先生、「Kodomomフィットネス」武内麻衣先生に依頼し、保護者支援に関する研修を行った。研修を通して、地域連携活動では子どもとの関わりだけでなく、保護者との関わりも重要であり、保護者と接する際には、保護者の話に共感し、寄り添うことが必要であることや、親子遊びの会での気づきを保護者や子どもたちにフィードバックすることも重要であることを学んだ。これまで保護者との関係に不安を感じていたが、研修を通じて保護者の視点を理解することができ、不安が軽減された。研修で学んだことを、今後の親子遊びの会で活かし、実践的な経験を積み重ねていきたい。



(写真3) 共同研修

7. 考察

今年度前半の活動から、地域、子育て支援の団体やサークルと連携を広げることで、新たな子育て支援や保護者支援のニーズを知ることができる。保育者としても、個々の家庭の支援人数を知り、個々に合わせた支援方法を考えていくことが求められていることを学んだ。また、遊び活

動を企画し、実践していく中で、親同士の交流の機会となり、親子の関わりを広げることができ
る効果が得られることに気づくことができた。さらに、親子遊びの会の活動を通して、子ども
の姿に合わせて環境構成を新たに創造する力や活動を実際に行っていく中で、新たな可能性や課題
を見つけ次の活動に生かす力、保護者の思いを理解し、支援方法を考える力などが求められてい
ることを知ることができた。

8. 結論

本会は、保育者や子育てサークルと連携したことで、幅広い子どもの発達支援、保護者支援、
親子の関係性支援としての効果がより強まると推測する。そして、学生が遊び活動を企画し、実
践していく中で活動方法によって親同士の交流を活性化したり、親子の関わりを広げたりするよ
うな効果が得られることが考えられる。この活動を通して、子どもに即して環境構成を新たに創
造する力や活動を振り返りながら新たな可能性を検討する力、保護者の想いを理解し支援方法を
考える力などが向上したと考える。

9. 今後の課題

1. 地域の親子に寄り添った実践が行えるよう、子育てサークルとの連携を継続し、家庭支援の
ニーズに合った会を提供する。
2. 親子や子供同士、親同士の交流の機会を増やしていけるような活動の開催を行い、そのなか
ら学生同士の学び合いを深めていきたい。
3. 学生の中でも他学年と共に、協力することで思いを1つに企画を考えていくことが求められ
ている。

4. 宇都宮市環境学習センター事業の実施

桂 木 奈 巳

1 はじめに

自然遊びの会バーベナでは、2020年度より宇都宮市環境学習センターにおいて自然遊びの行事を受託している。本行事は、NPO宇都宮環境行動フォーラムとの協働で実施しているが、市の環境課題の一つである「生物多様性」を前面に出すことが求められている。行事の開催は毎年同じ場所であるが、毎年異なる発見があり、これを活かしたプログラムを検討している。今年度も学生の希望や卒業研究の実践等を取り入れ、リピーターの参加者を配慮し、いくつかの定番プログラムを用意し、同じ内容を連続して行わないように工夫した。2024年度は7月と1月の2回の行事を実施した。

2 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター7月」の実施

2-1 実施の概要

実施の概要を表1に示す。今年度もスタッフとなる学生の負担減のため、学生の下見は実施しなかったが、何度か使用している場であるため、支障はない様子であった。大学内での準備の他、リハーサルは当日の朝に現地で簡単に実施した。

行事の周知は環境学習センター発行の情報誌にて行い、受付は環境学習センターが対応した。受付当日に定員を超える申し込みがあり、例年、人気の講座となっている。

表1 行事の概要（7月）

実施日時	2024年7月26日（土） 10：00～12：00
実施場所	環境学習センター、クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年：山口桂汰、根本桃華、仲山日菜、坂本有偉 3年：天谷優里、山本侑奈、高久由伊、石崎莉菜 1年：黒尾羽衣音、森田かすみ
プログラムの内容	①ノーズ ②昆虫採集と観察 ③自作紙芝居読み聞かせ ④ウインドチャームづくり
参加者数	参加者 50名（保護者22名、子ども28名）

2-2 活動の様子

当日の活動の様子を資料1に示す。昆虫採集は毎年実施しているが、多く観察される種類は毎年異なる。今年は下見の段階でショウリョウバッタが多く見られたことから、バッタの習性を利用した「バッタ釣り」を行った。糸をつけた棒にバッタが乗った際には歓声をあげて感激する様子が見られた。しかし、バッタが乗った釣り具を怖いと感じた子どももいた。後半には別に展開している事業であるカーボンニュートラルを紹介する紙芝居を読み、暑い夏を乗り切る工夫として「ウインドチャームづくり」を行った。音源として用意したカピス貝の音色が涼しさを引き落とし、省エネルギーにも貢献できると想定された。

資料1 行事の様子（サイト掲載内容）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。

まずは「ノーズ」。ある生き物の特徴のヒントを順に紹介し、正解を考えます。特徴から生き物を想像するのは意外と難しいです。今回は、毎年行っている「虫採り」に加え、「バッタ釣り」を導入。学生さんがバッタ釣りの動画を作成して紹介しました。虫をもてない子用に推奨でしたが、大人にも人気でした。バッタが乗っている釣り竿？を子どもに持たせたいお父さんと、持ちたくない子どものせめぎ合いもありました。今年はシオカラトンボが多かったです。

後半は紙芝居とウインドチャーム作り。紙芝居は「カーボンニュートラル」について子どもにわかりやすいように工夫中のオリジナル作品を紹介しました。ウインドチャームは、読んだ紙芝居の流れで、暑い夏を涼しく過ごす工夫の一つとして作成いただきました。カピス貝同士が触れ合うときに出る「カラカラ」という涼しげな音を楽しんでもらいました。



「ノーズ」

カブトムシやセミなど、よくいる生き物を題材にしました。モグラは難しかったみたい。



「バッタ釣り」

メスの上にいるオスの習性を利用しています。緑と黄に着色した木片にたこ糸を結んだ「釣り竿」を用意しました。



「手遊び」

紙芝居を読む前の手遊びです。保育学生らしさがでていました。



「紙芝居」

カーボンニュートラルを子どもに伝えるための紙芝居を作成し、紹介しました。改良中です。



「ウインドチャーム」

暑さをひと時忘れるような、涼しげな音が出ます。見えない風も意識できて「涼しさ倍増」。



あらかじめテグスに結んだカピス貝を木のリングにつけ、貝やヒトデ等の装飾物を貼り付けて完成です。

2-3 参加者の反応

資料2に本行事のアンケート結果の一部を示す。回答者は大人の参加者である。良い評価をいただき、学生への好意的な評価もあり、充実した行事になったことがうかがえる。

資料2 参加者へのアンケート結果

Q1) 講座内容はいかがでしたか？	満足 100%
Q2) スタッフ対応はいかがでしたか？	満足 100%
自由記述	<ul style="list-style-type: none">・虫が苦手な娘だったのですが、今日は自ら触りに行こうとして驚きました。・熱中症対策や車などの安全対策がなされていた。・水と虫が楽しかった。親切に声をかけていただいて感謝しています。とても楽しかったです。ありがとうございました。・子どもたちにとっても優しく接していただきました。特に下の子（2歳男児）がとても楽しそうにしていました。学生さんたちが頑張っているのが伝わってきました。

3 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター1月」の実施

3-1 実施の概要

実施の概要を表2に示す。寒い中での行事であるため、前半は屋外、後半は室内で実施という構成とした。

表2 行事の概要（1月）

実施日時	2025年1月25日（土） 10:00~12:00
実施場所	環境学習センター、クリーンパーク茂原東側林地
学生スタッフ	4年：山口桂汰、根本桃華、仲山日菜、坂本有偉 3年：天谷優里、山本侑奈、高久由伊、石崎莉菜 1年：黒尾羽衣音
プログラムの内容	①トトロを作ろう ②動物発見ラリー ③ドリームキャッチャー作り
参加者数	参加者 25名（保護者11名、子ども14名）

3-2 活動の様子

活動の様子を資料3に示す。今年度、屋外でのプログラムである「トトロを作ろう」は豊富にある落ち葉で遊ぶことをねらいとしたが、霜が降りた関係で落ち葉が湿り、実際に触れ合える状況にはならなかった。「動物発見ラリー」は取り上げる生き物を変えて毎年実施している、今年には新たに「ヤマコウバシ」と「モグラ」を加え、マンネリ化にならないように配慮した。屋内での制作は草木染毛糸をつかった「ドリームキャッチャーづくり」で、学生の卒論実践の一部とした。自然素材で染めた10種・10色の毛糸を自由に選んで制作してもらった。

資料3 活動の概要（バーベナのサイトより）

宇都宮市環境出前講座「親子で自然体験 in 環境出前講座」を実施しました。

最初にアイスブレイクとして「トトロを作ろう!」。家族で1つ、レジ袋に落ち葉をつめてトトロを作りました。「生き物発見ラリー」では、「モグラ」「ヤマコウバシ」「冬芽」「カイガラムシ」「ジョロウグモの卵塊」を探し、それぞれの生物の冬越しの様子を観察しました。

後半は室内に移動し、「草木染め毛糸のドリームキャッチャー作り」を行いました。スオウ、アカネ、アイ、エンジュ等で染めた毛糸を使いました。色とりどりの綺麗な作品ができました。

今年度の活動はこれで終了しました。参加くださった皆様、環境学習センターの方々には大変お世話になりました。



「トトロを作ろう」

落ち葉の山の中に隠れている「トトロの素」を探します。落ち葉の山はたくさん作りました。



落ち葉をつめて、目と鼻をつけて・・・



「生き物発見ラリー」モグラ

よく見るモグラ穴を紹介。モグラがミミズを食べる方法は衝撃だったようです!



「生き物発見ラリー」冬芽

葉がおちた跡が、顔のように見えます。植物の種類により「顔」が違います。



「草木染め毛糸でドリームキャッチャー」

コツがわかると、スイスイと巻きつけられます。



参加者の作品たち。羽と毛糸で作ったいちごやボール等をつけてもらいました。

3-3 参加者の反応

資料4に本行事の参加者（大人）に依頼したアンケート結果の一部を示す。満足度も高く、良い評価をいただいた。

資料4 親子で楽しく自然体験in環境学習センター 参加者へのアンケート結果

Q1) 講座内容はいかがでしたか？	満足 100%
Q2) スタッフ対応はいかがでしたか？	満足 100%
自由記述	<ul style="list-style-type: none">・学生の皆さんが素敵な企画を考えて下さりとても楽しかったです・また参加させていただきたいです・子どもが楽しそうに遊べる環境を作ってくれていた・楽しみながら自然について学ぶことができとても有意義な時間でした

4 おわりに

本活動は、行事の広報や集客は環境学習センターやNPOうつのみや環境行動フォーラムが行い、プログラムの検討と実施を本グループで担当する形で実施してきた。このスタイルは双方に利点があり、特に日ごろから忙しい保育を学ぶ学生にとっては実践の内容に集中できるため、理想的である。広報は市報の利用から環境学習センター広報誌への掲載と形式が代わり、若干集客に影響がでている。本行事は就学前の親子を対象に、自然体験の入門編に位置づけている。自然に抵抗があった親子も、この行事への参加をきっかけに、他の自然系の活動にも取り組むようになったと伝え聞いている。今後もより多くの親子と共に自然を楽しむことを願い、活動を継続させたい。

5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告 1. 自然を感じよう～紅花でコースターを染める～

宇都宮共和大学子ども生活学部 教授 桂木 奈巳

活動の概略

1. 日 時：2024年5月19日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参加者：合計27名。子11名（2歳3名、3歳2名、4歳3名、5歳3名）、保護者15名
4. 担当教員：桂木、田淵
5. 参加学生：6名：子ども生活学部4年生：仲山日菜、根本桃華、
3年生：天谷優里、石崎莉菜、高久由伊、山本侑奈

活動の内容

1. 内 容：テーマ「自然を感じよう～紅花でコースターを染める～」
2. 事前準備
計2回集合し、打ち合わせと事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9：15～ 現地集合・準備
10：15～ 参加者受付・入室
10：30～11：20 制作
11：20～11：30 まとめ、アンケート、閉会
11：30～ 掃除・片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）



写真1 紹介した紅花とその加工品



写真2 染色の様子



写真3 ダンゴムシ迷路

活動の様子

この日に使う紅花を紹介し、「教草（江戸時代の子ども用教材）」の中で紅花染めが扱われていることを紹介し、古くから生活に取り入れられていることを伝えた。その後、あらかじめ簡易に染められるよう工夫・作成した「染色キット」を使って参加者に紅花染（非加熱・赤色素での染色）を体験いただいた。後半から、染色の待ち時間と飽きてしまった子ども用に、学生が作成した「ダンゴムシ迷路」を加えた。

学生の手際も連携も良く、参加者の様子を見て、作業の補助や材料の配布をしてくれた。

以上

5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告 2. つくってあそぼう

～家庭にあるモノや廃材を教材化し、てづくりおもちゃをつくる～

宇都宮共和大学子ども生活学部 教授 市川 舞

活動の概略

1. 日 時：2024年9月22日（日）10時30分～11時30分
2. 場 所：ミナテラスとちぎ（宇都宮市インターパーク6-2-1）セミナールーム
3. 参加者：合計38名（保護者17名、0歳2名、1歳1名、2歳3名、3歳7名、4歳2名、5歳3名、6歳1名）
4. 担当教員：市川、星
5. 参加学生：6名：子ども生活学部4年 小堀彩花、櫻井和寿、西川綺華、根本桃華、柳百香、子ども生活学部3年 大貫陽香

活動の内容

1. 内 容：「つくってあそぼう」家庭にあるモノや廃材を教材化し、てづくりおもちゃをつくる
2. 事前準備
計2回集合し、教材研究、事前準備を行った。
3. 当日のスケジュール
9:00 現地集合、会場設営、教材搬入
9:30 環境構成
10:15 受付開始
10:30 活動開始
11:20 まとめ、アンケート、閉会
11:30～ 掃除・片づけ
4. その他
 - ・現地で学生と教員に昼食弁当配布あり。
 - ・学生に2,000円クオカード支給（大学より）



写真1 わたしのおばけ



写真2 一緒にやってみる



写真3 自分でやりたい

活動の様子

牛乳パック、ストロー、ビニール袋、輪ゴムなど生活に身近なモノを教材化し、「おばけ」をテーマに、動くおもちゃづくりをした。教材を組み合わせることで、「膨らむ、登る、揺れる、はじける」などの動きを生み出すしくみをつくり、関わって遊んだ。

子どもたちは「おばけ」のイメージを膨らませてつくることや繰り返し遊ぶことで楽しみながら、教材の特性やしぐみの面白さを味わう姿があった。

参加する子どもの保護者も、身近なモノを教材化して自分なりにイメージを膨らませたり、試しながらつくって遊ぶことをめあてに参加しており、はさみや針（毛糸針）、テープカッターなどの道具を用いる体験ができることにもよさを感じていた。また、親子で一緒に取り組んだり、子どもの姿を学生が積極的に認めている様子を目にしながら、その子どものよさ一興味や関心、粘り強さ、考える力、イメージを表現する力などを再発見している様子だった。

学生からは、教材研究の意義や挑戦的意欲を引き出したり、何度も繰り返し試す機会を保障したりする物的・人的環境の重要性への気づき等の感想が寄せられた。

以上

5. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 「大学連携親子ワークショッププログラム」報告 3. 「親子リトミック」

子ども生活学部 准教授 大島 美知恵

1. はじめに

リトミックは日本においては幼児教育、療育、地域の子育て支援事業等の中に広まりつつあり、また「習い事」としても楽器を習う前の音感教育として普及してきている。この親子リトミックの活動は企業の地域コミュニティ施設と連携し、2歳～5歳の子ども達を対象に年3回のペースで2年間、そして昨年度からは年2回のペースで行ってきた。そして、このリトミック活動を通しての目的は以下の3点である。①子どもだけではなく親も共に楽しめる場を提供する。②地域の親子と学生たちとの交流を推進する。③学生が親子の関わりを通して、保育者としての視点を学ぶ場となる。2024年度はこれに加え、アフターコロナへの転換から、参加している親子同士の出会いと交流の場となることも目的となり、それにねらいをおいた活動も行うようになった。この1年の活動について報告する。

2. 活動概要

(1) 日 時

2024年7月14日（日）

2025年2月16日（日）

10：30～11：15 ワークショップ

11：15～11：30 ミニ講座・絵本の読み聞かせ

(2) 会 場：ミナテラスとちぎ

（宇都宮市インターパーク6-2-1）

セミナールーム

(3) 対 象 者：2歳～未就学児をもつ家族（父親・母親・子ども）

親子合わせて20名程度

参加人数 7月14日（子14名、保護者12名）

2月16日（子13名、保護者16名）

(4) 参加募集と受付：栃木トヨタが窓口

(5) 参加学生：子ども生活学部3年生5～6名の学生が参加した。



3. 活動の内容

(1) 各回のテーマ

7月14日「いろんな音と動きで遊ぼうリトミック」

2月16日「親子でふれあい、ほんわかリトミック！」

(2) 事前準備

毎回4～5回の打合せと練習を行った

第1回：企画・担当決定

第2回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習

第3回：教材製作

第4回：ワークショップの流れを確認、学生担当部分の練習

第5回：最終打ち合わせ

(3) 当日のスケジュール

9：00 現地集合

9：30 会場の設営と準備

10：15 参加者受付

10：30 ワークショップ開始

11：15 保護者向けミニ講座（教員）7/14のみ。2/16は資料配付。

絵本の読み聞かせや遊び（学生）

11：30 終了、参加者は解散。掃除・片づけ

12：00 学生・教員解散

4. 活動の様子

各回共に季節の風物詩を題材とし、視覚教材を入れたパネルシアターや身体活動、楽器活動を行った。昨年度から、コロナの感染状況に配慮しながら、参加している親子同士の関りも幾らか取り入れながら進めてきたが、今年度からは積極的に取り入れるようにした。

7月は紙やビニールなど様々な素材や教具を取り入れることによって、自然に子ども同士がコミュニケーションを取っている姿が印象的であった。2月は親子で身体を動かすことを主軸とした活動であったが、保護者も子どもたちと共に積極的に動いて楽しむ姿が見られた。また近くの親子と共にグループを組んで触れ合う活動も幾つか取り入れ、親子同士が交流するきっかけづくりを担った。

これまでワークショップ終了後には、保護者に向けて講師がミニ講座を行い、リトミックの機序や目的等を説明し、その間子どもたちは学生と遊ぶことになっていた。しかし年々参加する子どもの低年齢化が進み、保護者と子どもの分離が難しい状況が見受けられるようになってきた。よって2月はこれまで講話してきた内容を記載した資料を保護者に配付し、子どもたちが学生と遊んでいる間に読んでもらうという方法に変更した。こちらの方法の方がスムーズに終了できているように見受けられたが、今後、様子を見ながら検討していきたい。

学生は両回共に3年生が担当してくれた。7月は実習直後であったにも関わらず、教材の制作やアシスタントとしての練習、名札づくりなど得意分野を活かした分担をして協力してくれた。

2月においても自分たちから「ミナテラスはまだですか？」と尋ねてくるくらいに積極的な姿勢が見られ、「これがやりたい」と内容についても意見を伝えてきた。当日もそれぞれの役割をしっかりと果たしていた。

5. 保護者アンケート

昨年度に引き続き、子どもがとても楽しそうに活動できていた。子どもだけではなく、親も一緒に楽しめた。という声を多数聞くことができた。昨年度は人数が20名以上になった回において「以前のリトミックは楽しかったが、今回は子どもが楽しめていなかった」との意見が1件あったことから、今年度は子どもの数を15名～17名程に留めてもらった。よって今年度はそのような否定的な意見はなく、内容的にも、学生・講師に対しても、満足しているようであった。

親子でペアを組んで行う活動で、学生が兄弟児の相手役になることについて、感謝の言葉が多く見受けられた。

6. 学生アンケート

今年度参加した学生たちは、これまでも数回参加しており、本ワークショップ以外の学生ボランティアでも積極的に活動している。多くの経験を重ねていることから、活動中の細かな子ども達の様子に対しての気づき、それに対する改善点について保育の視点から意見を述べていた。

7. まとめ

今年度はアフターコロナへの転換から親子同士の活動を行えたことが、これまで（コロナ以降）から変化した内容であった。しかし、まだコロナ以前のように手放して安心してマスクを外せる状況には至らず、更に安心な状況の確保が望まれるところである。その際には「息」を使った遊び、「吹く楽器」、長らくマスク下で刺激が少なくなっているであろう「表情遊び」なども活動に取り入れて、親子の豊かな経験や学生の学びを深めていきたい。



Ⅶ. 宇都宮共和大学子ども生活学部卒業研究

1. 2024年度卒業研究題目一覧

青山 諒大	チョッパーカスタムが施されたバイクの印象に関する研究
赤羽 優亜	オタク文化が子どもに与える影響に関する研究 ーアイドルに対するファンの心理からー
阿久津樹里	青年期・思春期のスポーツ経験が及ぼす影響 ～心理的側面の相関関係の検討～
阿部さとみ	運動嫌いの原因と指導者の役割
池口 琴美	若者の理想の恋愛についての研究
池田 泰誠	ニュージーランドと日本の保育を比較して ーICTとテ・ファリキの視点からー
石川 奈々	乳児期の笑いと遊びの関係性について
稲葉あかり	即興演奏の歴史と手法
今高 上	意識の変化をもたらす異文化経験とは ～フィジー共和国における留学経験者の語りを通して～
印南 紅葉	髪を染める効果と影響
大島 聖未	今後の幼児期におけるICT教育の活用について
大島 誓奈	多様な家族の形 ～家庭養護の推進に関する一考察～
大橋 菜月	環境による性格形成 ～MBTI診断を用いて～
川崎 凧沙	大学生の「結婚」へのイメージ、「結婚観」
久保田真奈	若者の音楽に対する関わり方
黒田 菜南	東京ディズニーリゾートにおけるバリアフリーの実態
小池 彩楓	ファッション変遷から見るロリータファッション
小堀 彩花	きょうだい児への支援と課題について
齋 弥生	ICTを用いたスケート初心者の短時間技術習得プロセスに関する質的研究
齋藤 優佳	絵文字を使うことのメリットとデメリットについて
坂本 有偉	家庭用ゲーム機が幼児に与える影響について
櫻井 寿成	自己肯定感が対人関係に及ぼす影響について ー幼児期に自己肯定感を育む意義についてー
澤畑 佳穂	ごっこ遊びの影響について
下山ひかる	邦楽歌詞研究 ～back numberの歌詞表現について～
白岩 亜深	保育における笑いやユーモア
鈴木 京香	BGMと不快音楽の相違点 ー選曲するとき気をつけることー
高橋優梨子	聴覚情報処理障害（APD）傾向をもつ大学生の生活における困難感について
高村 美咲	化粧行動における心理的影響
竹井 愛美	音が出るおもちゃが子どもに与える効果
竹尾 毬愛	子どもの自発的歌唱

竹森 泉	高校野球における応援歌の切り替え場面に関する研究
田崎明優美	幼児期の遊びを通じた金銭教育について
千葉 光翼	指導者の言動がスポーツ選手のやる気に及ぼす影響
仲山 日菜	現代に生かす「教草」の意義と検討
西川 綺華	保育者のジェンダー・バイアスと保育実践 ～『保育所保育指針』の記載と保育者の意識の変化～
庭野 彩香	親の離婚と子どもの家族観
根本 桃華	虫遊びを通して自然と親しむ
野沢 秀太	幼少期における運動経験が及ぼす影響について
平山 萩袈	手作り楽器 ～製作過程と造形表現について～
細田 紗彩	2歳児保育のヒヤリハット ～A保育園の事例報告の検討～
細野 心愛	青年期における友達作りについて ～幼児期と青年期の違い～
村井 彩乃	左利きの生活から考える利き手の多様性
村田 瞳	ぬいぐるみの影響と効果
柳 百香	暴力描写が与える影響 ～アンパンマンは子どもが見るにふさわしいのか～
山内 美奈	若者における洋服の選択について
山口 桂汰	カモフラージュと自然保護 ～実践活動を通して～
湯澤 理乃	青年期の「生きづらさ」に繋がる母子関係のエピソードの分析 ～ポリヴェーガル理論を用いた神経生理学的見解と脱却方法～
増渕 珠久	描画と音楽
丸山 岳	幼児期の音楽教育について
田村 美雪	遊具についての研究

2. 全国保育士養成協議会関東ブロック協議会 第38回学生研究発表報告

主催：全国保育士養成協議会関東ブロック協議会

日程：2025年2月28日（金）

会場：聖徳大学

現代に生かす「教草」の意義と検討

宇都宮共和大学 子ども生活学部4年 仲山 日菜

指導教員：桂木 奈巳

親の離婚と子どもの家族観

宇都宮共和大学 子ども生活学部4年 庭野 彩香

指導教員：蟹江 教子

現代に生かす「教草」の意義と検討

仲山 日菜

(宇都宮共和大学 子ども生活学部 子ども生活学科 4年)

1. 目的

近年、持続可能な社会を目指し、自然との共生は重要なものであると認識されている。しかし、過疎化や情報通信技術の進化等を要因として自然を直接体験することが減少し、自然に対する知識は有しているが体験を通じた気づきを得ることは難しい状況にある。

教草は、日常生活における産物の製造方法や技術を、子どもへ伝えるために明治時代に制作されたものである。昔の技術や自然への意識を現代に生かすことで、豊かな感性や自然への親しみ、自然と共生しながら日々を豊かに生活する意欲を育むことができると考える。

本研究では、教草を用いた実践活動を通じ、自然と共に生きる大切さや持続可能な社会への意識を育むことを目的とする。子どもや保護者を対象に実践活動を行い、教草の現代における有用性や意義を検討し、教草を現代で有効的に活用する方法を考案する。

2. 先行研究

(1) 「教草」とは

「教草」とは、1873年に開催されたウィーン万国博覧会に出品するにあたり各府県から集めた名産品の製造過程を図説し、日常生活における衣食の原料や製造方法を子どもたちに伝えることを目的として制作された教育錦絵¹⁾である。日本では日用品の製造過程に対する理解が浅く、これを深め子どもへ伝えることが日本の各業の発展に寄与すると考えられていた²⁾。また、世界に日本の殖産興業を広めることで、海外輸出を図り国益に資するねらいもあったとされる。

(2) 明治時代における「教草」と教育の関連性

子どもへ向けつくられた教草であるが、当時、実際に教育現場で使用された記述は筆者の文献調査の範囲内では見いだせず、実際に用いられたかは不明である。しかし、教草と類似した書物として、明治時代、子どもへ視覚的に訴える実物直観の方法により編纂された「単語図」や「博物図」などの掛図を用いていたとある³⁾。掛図と教草は、紅花の項などにおいて植物のつ

くりや染め物の方法に共通の表現がみられる。また、明治時代の近代学校で使用したとされる「博物図教授法」を著している田中芳男が、教草を企画し製紙一覽を著述している。掛図等と教草の図や言葉に類似点があることや、明治時代の教育資料を同一人物が著していることから、教草と教育資料には関連性があると推察される。

3. 「教草」を生かした実践活動

(1) 紅花染めの実践 -べに一覽より-

未就学児の親子を対象に、2024年1月と5月に実践を行った。1回目は親子27名、2回目は29名である。教草を基に作成した教材を用いて、教草の紹介と紅花染めの実践を行った。

紅花染めの実践活動では、親子を対象に教草の内容を提示しながら紅花染めを行った。火を使用せずに染色できることに楽しさを感じ、紅の鮮やかな色合いや独特な香りに興味をもち五感豊かに活動していた。教草は原本を参考に教材を作成し紹介を行ったが、興味を強く抱いた様子はみられなかった。しかし、乾燥紅花や紅餅など実物を示すことで関心が高まり、内容を深く知りたいという意欲が生まれていると考えられる。

(2) こんにやくづくりの実践 -褐腐一覽より-

本学学生7名を対象に2024年2月にこんにやくづくりを行った。教草の紹介やこんにやく作りを通じ、身近な食物の製造過程への興味を高め、昔の用具や生活への関心を高めることを目的とし実施した。

芋から作ることで、身近な食材の製造過程に興味を持ち、昔の人々の発想に対する驚きや技術の高さを感じていた。こんにやく作りでは、昔ながらの生活へ関心を高め、親しみを深めて自身の生活を改めて捉え直すきっかけとなると考える。

4. 試行

(1) 藍染め -藍一覽より-

藍染めは、染め物の中でも親しみ深いこと、たたき染めは使用用具が少なく、子どもでも容易に染めることができると考え試行した。

藍染めは火を使わずに行えること、色合いが美しいことから子どもに行うことに適していると考えられる。しかし、藍を育てる必要があり、生葉をつかうたき染めは、採取可能な夏季でないと行えないという難点がある。けれども、藍は容易に育てられ、自ら育てた植物を身の回りの生活へ生かせることには意義がある。子どもと共に行動する際は、種から育て染色を行う過程を保育の中で計画的に実践することが必要である。

(2) 糖製 ー糖製一覧よりー

サトウキビから砂糖を作ることで、化学調味料ではない自然な甘さを感じ、五感豊かに味わえると考えたと考え試行した。

糖製は、サトウキビの皮を剥くこと、布で汁を絞り出すことは力が必要なため、子どもだけの力では難しい可能性がある。しかし、煮詰めることや作った砂糖を食すことは、砂糖ができる過程への興味、自然な甘さを感じられることなど、子どもが身の回りの事象に対し感性豊かに関わることが期待できると考える。また、砂糖精製以外においても、サトウキビを噛むことで独特の甘味も味わえるため、サトウキビという植物と十分に関わる活動とすることも意義深いものであると考える。

5. 図書館展示

(1) 概要

教草は、教養として意義深いこと、本学は教育に関する学部があることから、教草の内容を生活に関連付けて展示することで、保育を学ぶ学生の刺激となることを期待し、宇都宮共和大学図書館での展示を行った。展示期間は、2024年10月15日から11月1日である。教草の展示から、明治や江戸期の自然と共生する知識を現代に伝え、生活の豊かさにつなげることを目的とする。

教草の項目の中から、特に生活に身近であると考えられる10項目を選び展示を行った。各項目の教草について、一覧名、概要、教草のパネル、内容に関する物品を展示した。また、実践活動を行ったものに関しては、実践の写真も共に展示した。教草一覧だけではなく、染めた布や植物の実物を置くことで、観賞の際、興味関心が高まり、内容をより身近に理解することを期待し工夫した。

展示では、実物があることで内容により興味が高ま

り、教草の内容を自ら読み解き、これまでの生活と結び付けながら今後の生活について考えようとする姿がみられた。

(2) アンケート調査

展示観賞者へ、教草とSDGsの関連性について質問紙法でアンケート調査を行った。アンケートの回答数は、76件である。

調査の結果、「つくる責任つかう責任」「陸の豊かさも守ろう」の項目で選択の多い回答となった。製造過程や原材料などへ興味、物が循環することへの関心が高まっているといえる。身の回りの事象に対する興味が、持続可能な社会への意識の高まりや、考えようとする力の育ちへつながると考える。選択のないものとしては、「海の豊かさを守ろう」「パートナーシップで目標を達成しよう」が挙げられた。

展示において、物品や直接的な描写から、生産過程への気づきや陸の豊かさを感じとることができる様子である。しかし、それらの生活を支える描写がされていない背景について、想像し考察することは難しいと考える。

6. おわりに

教草を生活に親しい身近な物を取り上げ現代に生かすことで、教草への興味や自然の恵み、物を大切にしようという気持ちが生まれていくと考える。

保育においては保育者自身が、身近な物の製造過程や原材料などに対する関心を抱いていることが重要であると考えられる。子どもに身近な大人として、保育者が、身の回りの物事について興味を抱きながら生活し、子どもが疑問や不思議さを感じた際、分かりやすく伝えることや、共に考え日常の保育へとつなげていくことが、子どもの豊かな感性や人間性、創造性といった人として生きる上で重要な力が育まれるであろう。

教草を現代に親しみやすい形とすることで、持続可能な社会への意識の育みへとつながったといえよう。

引用文献

- 1) 井上素子 (2014) 「近代教育錦絵の研究 - 『文部省発行教育錦絵』における図像解釈とその典拠」筑波大学大学院人間総合科学研究科芸術専攻博士論文, pp146-147
- 2) 樋口秀雄 (1977) 『教草』恒和出版, p76
- 3) 中村勝男 (1987) 『資料が語る明治の小学校教育：学制から教育令まで』p127

親の離婚と子どもの家族観

庭野彩香

(宇都宮共和大学子ども生活学部子ども生活学科4年)

1. 研究の背景と目的

厚生労働省(2022)によると、現在の日本では、およそ3組に1組が離婚していると明らかにされている。それに伴い、親の離婚を経験している子どもも増加傾向にある。親の離婚は、子どもにどのような影響を与え、子ども自身の描く家族観にどのように関わってくるのであろうか。

本研究では、親の離婚を子ども自身はどのように受け止め、考えているのか、親の離婚を経験した子どもの結婚や離婚への意識には、どのようなものがあるか、親の離婚を経験した子どもの家族観について明らかにする。

2. 研究の方法

(1) 調査対象者

親の離婚を経験したことのある人を対象に3名にインタビュー調査を行った。インタビュー調査の対象者は、学生2人、社会人1人で、全員女性であった。なお、インタビュー調査では対象者に研究の目的を説明し、承諾を得たうえで実施した。親の離婚や再婚については、プライバシーに関わることとなるため、個別で対面の調査とした。

調査対象者の属性は表1の通りである。

表1 対象者の属性

	年齢	性別	職業	離婚の状況・現在
Aさん	21歳	女性	学生	高校3年生・ひとり親
Bさん	22歳	女性	社会人	生まれてすぐ・ステップファミリー
Cさん	21歳	女性	学生	2歳・ステップファミリー

(2) インタビュー調査の時期

令和6年7月～9月に行った。1回の調査時間は20～50分程度であった。

(3) インタビュー内容

①両親の離婚について、②自身の恋愛観について、③自身の結婚観について、④自身の家族観について、などについて尋ねた。

3. 結果

今回インタビューの対象者たちが共通して感じているのは、「親の離婚に否定的でない」ということであった。対象者たちは「親は親」「自分は自分」の家族観を持っていた。その中でも、「父、母、子」のいわゆる一般的な家族について強い憧れを持ち、自分自身が結婚したい、子どもがほしいという思いもあることが明らかになった。

インタビューを行った3人は、自分の本当の父親を知らなかったり、離婚後も前の父親と定期的に会っていたり、今は親が再婚して新しい家族がいたり、さまざまな家族の形が存在している。対象者たちは、インタビューの中で、「どんな形でも家族」と話していた。一緒に暮らす家族、離れて暮らす家族、血縁関係はないけど家族、対象者たちが思う家族の形はたくさんある。この家族の形を作り出したのは、離婚後も前の父親と定期的に会う機会を設ける、離婚の理由をきちんと子どもに伝える、年齢にもよるが、子どもの意見があるときには尊重する、新たな家族を迎えるなど、離婚や再婚に至る上での両親の配慮である。離婚や再婚に伴う、環境の変化は子どもに大きな影響を与えるが、子どもの意見を尊重する親の思いやりがあることが、彼女たちの離婚や再婚への意識に変化を与えるのだと明らかになった。

しかし一方で、「親が離婚していると、夫婦の在り方がわからない」という意見や、対象者たちから見る家族と第三者から見る家族での異なる部分に、葛藤があることも明らかになった。

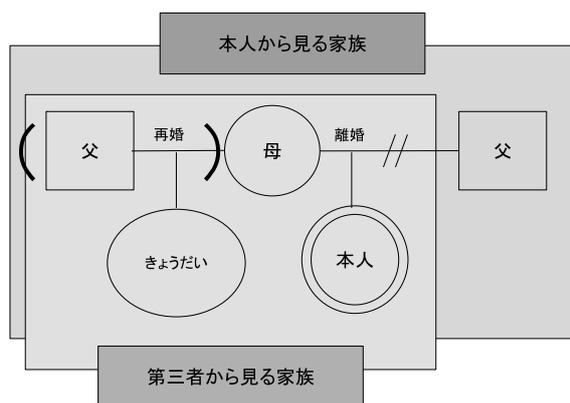


図1 インタビュー対象者の家族図

上の図のように、彼女たちは常に2つの家族を意識して生活をしている。本人から見る家族と、第三者から見る家族には違いがあることが分かる。彼女たちは、この違いで起こるすれ違いに葛藤している。そんな対象者たちにとって、同じ経験をし、互いの話に共感し、互いを認め合える存在が身近にいることが心の拠り所であった。だからこそ、彼女たちから見る家族の在り方を模索し続けており、社会にはさまざまな家族像を受け入れる姿勢を示すことを求めている。

4. 考察

インタビューの対象者たちは「親は親」「自分は自分」の家族観を持っていることが分かった。自分自身の恋愛や結婚、子どもについても前向きであることから、今回のインタビューでは、親の離婚が子どもの恋愛や結婚に必ずしもマイナスに働くわけではないと考えられる。

しかし、先行研究やインタビュー調査の中には、「親が離婚していると、夫婦の在り方がわからない」という意見があることも事実である。親の離婚を経験している人にとって、親の夫婦としての関わりを、自分の目でみる時間が少なかったことが原因として挙げられると考えられる。だからこそ、「相手選びに慎重になり、なかなか恋愛に踏み出せない」「家族に対して幸せなイメージが浮かばないから結婚が怖い」(太田ら、2008)などの意見が出てくるのだろう。この不安を解消するためには、親の離婚を経験した人は、経験していない人よりも、より時間をかけて家族の形や家族の在り方について考える必要があると考える。親の離婚を当時はどうに感じ、現在はどのように受け止めているか、自分自身の人生観はどのようなものなのか、結婚や離婚に対してどの

ような意識でいるのか、などより深いコミュニケーションと、より深い時間が求められる。

本研究では、親の離婚と子どもの家族観について考えてきた。親の離婚を経験した子どもがその後、良い家族観を持つためには、両親の配慮と子ども自身の歩み寄りが必要であることが明らかになった。お互いがお互いを思いやる心を持ちながら、けじめを付けていくことで、親は親、子どもは子どものそれぞれの人生が始まると考える。厚生労働省によると、現在の日本は、離婚件数は減少傾向にあるものの、未だに3組に1組が離婚している。親の離婚を経験した子どもが家族の在り方の寛容性を求めていることも事実である。自分たちも「当たり前の、普通の家族」として受け入れてほしいと感じている。私たちにとって離婚が身近な存在になっているからこそ、さまざまな家族の形や家族の在り方について考え、受け入れていくべきだろう。

引用文献

- 厚生労働省,2022,「令和4年人口動態統計月報年計の概要」
 太田垣章子、榊原富士子、新川てるえ、二宮周平、本沢巳代子,2008,『離婚家庭の子どもの気持ち』,日本加除出版

資料

I. 2024年度子育て支援研究センター事業報告

I. 主催事業

1. 子育て支援研究センター公開講座

第40回 7月27日（土）

「叱らなくても子どもは伸びる 子どもが最高に力を発揮する子育て」 親野智可等先生

参加者 38名

2. 地域の就学前施設との交流を取り入れた保育者養成教育

(1) 訪問型交流保育 認定みどりこども園

第1回 4月24日（水） 年長53名、年中41名

第2回 4月30日（火） 年長53名、年中41名

第3回 5月1日（水） 年長53名、年中41名

第4回 5月7日（火） 年長53名、年中41名

第5回 5月8日（水） 年長53名、年中41名

(2) 来校型交流保育 認定しらゆりこども園

第1回 6月5日（水） 年中児86名

第2回 12月3日（火） 年中児86名

第3回 1月24日（金） 年少児86名

(3) 訪問型交流保育（教育課程時間外）

1月15日（水）

- ①認定みどりこども園 年少～年長児 約60名
(インフルエンザ流行のため中止)
- ②認定こども園釜井台幼稚園 年少～年長児 約90名
- ③風と緑の認定こども園 年中～年長児 約60名

3. Tiny（障がいのある子どもと家族の支援）

(1) ふれあいTiny隊（障がいのある子どもたちとのふれあい遊び）

- ①6月29日（土）：地域の障害のある乳幼児・児童とご家族（子ども9名 保護者7名）
児童発達支援放課後等デイサービス（こども16名 職員10名）
計：子ども25名、大人17名

- ②2月9日（日）：地域の障害のある乳幼児・児童とご家族（子ども8名 保護者7名）

(2) 第12回 Tinyファミリーコンサート

～障がいがあってもなくてもみんなが楽しい音楽の集い～

日時：10月6日（日）13：30～15：00

場所：宇都宮市サンアビリティーズ

内容：たまっ子座 参加者：108名

(3) 彩音祭でのワークショップと展示活動

4. 親子遊びの会 ―子育てネットワークづくり―

第1回（第52回） 7月6日（土） 本学保育実習室、402教室

「七夕の会」 参加者 子ども10名 保護者7名

第2回（第53回） 11月9日（土） 本学アリーナ

「親子フィットネス」 参加者 子ども11名 保護者10名

第3回（第54回） 12月15日（日） ミナテラスとちぎ

「お正月遊び」 参加者 子ども16名 保護者20名

5. 卒業生のためのリカレント教育

第1回 8月24日（土）

星順子先生「コロナ後の子どもの姿～子どもの言葉に着目して～」

参加者：卒業生8名 教員6名

第2回 11月17日（日）

河田隆先生「コミュニケーションワーク『人は人の中で人間として育つ』

―心地よい人間関係づくり―

参加者：卒業生15名（子ども生活13名、短大2名）中学生1名 教員2名

II. 地域貢献事業

1. 那須塩原市民大学 宇都宮共和大学連携講座

前期2講座（シティライフ学部1・子ども生活学部1）

8月28日（水） 新井先生「音遊びで親子のふれ合いコミュニケーション」

参加者：親子6組、一般1名

（内訳：子ども：0歳1名・1歳2名、2歳2名、4歳1名 保護者：6名）

参加学生：子ども生活学部学生3年生 16名

2. とちぎ子どもの未来創造大学

7月20日（土） 桂木先生「アイ（藍）でマイ箸袋を染めよう！」

参加者：11名 見学者7名

3. 大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」

(1) 子育てサークルとの共同研修会及び学外研修会

- ① 8/24本学で外部講師（平野由起子氏、南部裕子氏、武内麻衣氏）による「保護者支援について」の共同研修
- ② 10/23本学で、学生代表と親子フィットネスの外部講師、教員で打ち合わせ
- ③ 11/9 本学で外部講師（柴田清美氏、坂内ひろみ氏）による「親子フィットネス」の共同研修

(2) 栃木県主催 中間報告会

10月29日（火） 代表学生 5名

(3) 栃木県主催 年度末成果報告会

2月4日（火） 代表学生 5名

4. 令和6年度大学コンソーシアムとちぎ

(1) 学生&企業研究発表会

大学地域連携活動支援事業「親子遊びの会」鹿沼相互信用金庫理事長賞 受賞

(2) CN推進学生地域活動支援事業

「子どもと一緒に脱酸素！幼児期から始めるCN教育」

5. 宇都宮市環境学習センター事業

(1) 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター7月」

7月26日（土） クリーンパーク茂原東側林地

参加者50名（保護者22名、子ども28名）学生10名

(2) 「親子で楽しく自然体験in環境学習センター1月」

1月25日（土） クリーンパーク茂原東側林地、環境学習センター4階

参加者25名（保護者11名、子ども14名）学生9名

6. 親子ふれあいネイチャー事業 NPOうつのみや環境行動フォーラム

(1) 8月3日（土） 宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ

参加者33名（保護者17名、子ども16名）学生10名

(2) 11月23日（土） 宇都宮共和大学内 子どもの森・アリーナ

参加者34名（保護者18名、子ども13名）学生10名

7. 宇都宮共和大学・宇都宮短期大学×ミナテラスとちぎ 大学連携親子ワークショップ
6回開催

子ども生活学部

- ①5月19日（日） 桂木
参加者 子ども17名 保護者16名
- ②7月14日（日） 大島
参加者 子ども14名 保護者12名
- ③9月22日（日） 市川
参加者 子ども19名 保護者17名
- ④11月24日（日） 月橋 霜触
参加者 子ども15名 保護者11名
- ⑤12月15日（日） 杉本 小野
参加者 子ども16名 保護者20名
- ⑥2月9日（日） 大島
参加者 子ども13名 保護者16名

Ⅱ. 2024年度子ども生活学部専任教員の社会貢献活動

職 位	教員氏名	委嘱の内容		
		名称	職位	設置者
学長	須賀 英之	[各種審議会・委員会委員等]		
		栃木県私立学校審議会	会長	栃木県
		栃木県公私立高等学校協議会	委員	栃木県
		栃木県文化振興審議会	会長	栃木県
		栃木県文化功労者選考委員会	委員長	栃木県
		とちぎの元気な森づくり県民会議	会長	栃木県
		「文化と知」の創造拠点整備構想検討委員会	委員長	栃木県
		栃木県信用保証協会外部評価委員会	委員長	栃木信用保証協会
		うつのみや産業振興協議会	会長	宇都宮市
		那須塩原市社会教育委員	委員	那須塩原市教育委員会
		栃木県私立中学高等学校連合会	副会長	
		[団体兼職]		
		大学コンソーシアムとちぎ	副理事長	
		栃木県交響楽団	会長	
		栃木県楽友協会	会長	
		栃木県オペラ協会	理事	
		栃木県文化協会	常任理事	
		うつのみや文化創造財団	理事	
		宇都宮まちづくり推進機構	理事長	
		「よみがえれ！宇都宮城」市民の会	会長	
		宇都宮市中心市街地活性化協議会	会長	宇都宮市
		宇都宮MICEネットワーク	会長	宇都宮市
		宇都宮市創造都市研究センター	センター長	
		全国音楽療法士養成協議会	理事	
		栃木銀行	社外監査役	栃木銀行
		あしぎん国際交流財団	理事	足利銀行
		宇都宮みずほ研修会	会長	みずほ銀行

学科	職 位	教員氏名	委嘱の内容		
			名称	職位	設置者
子ども生活学科	教授	河田 隆	栃木県子どもの体力向上推進検討委員会	副委員長	栃木県教育委員会
			栃木県幼児期からの運動遊び普及検討委員会	委員長	栃木県教育委員会
			栃木県レクリエーション協会	副会長	栃木県レクリエーション協会
			全国健康保険協会栃木主支部健康づくり推進協議会	副議長	全国健康保険協会栃木支部
			公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団	評議員(議長)	公益財団法人宇都宮市スポーツ振興財団
			宇都宮市社会教育委員会	委員長	宇都宮市
			宇都宮市子ども子育て会議	委員長	宇都宮市
			栃木県社会教育委員協議会	理事・評議員	栃木県教育委員会
			公益財団法人栃木県民公園福祉協会	評議員	公益財団法人栃木県民公園福祉協会
			那須塩原市民大学運営委員会	委員長	那須塩原市
			那須町小中学校部活動地域移行検討協議会	委員長	那須町教育委員会
			令和6年度幼少期の運動遊び指導者指導者研修会	講師	栃木県教育委員会
			令和6年度家庭生活支援員養成研修会	講師	栃木県ひとり親家庭福祉連合会
			那須町保育士研修会(2保育園)	講師	那須町こども未来課
令和6年度栃木県西部地区保育研修会	講師	栃木県西部地区保育研究会			
自治労土地現本部健康福祉評議会学習会	講師	自治労栃木県本部			
子ども生活学科	教授	杉本 太平	日本関係学会研修委員会	委員長	日本関係学会
			埼玉県家庭教育アドバイザー養成研修	講師	埼玉県教育委員会
			那須塩原市市民大学講座	講師	那須塩原市教育委員会
			那須塩原市子ども未来部養成研修	講師	那須塩原市子ども未来部
			日本子育てアドバイザー養成研修	講師	日本子育てアドバイザー協会
			宇都宮市民大学	講師	宇都宮市
			人間関係HRST研究会	会長	
			日本人間関係学会「人間関係士」資格委員会	委員長	日本人間関係学会
			栃木県家庭教育オピニオンリーダー研修	講師	栃木県総合教育センター生涯学習部
茨城県市町村家庭教育支援担当者研修	講師	茨城県教育委員会・教育庁総務企画部生涯学習課			
子ども生活学科	教授	桂木 奈巳	第3次宇都宮市緑の基本計画策定懇談会	委員	宇都宮市
			セオリー研修	講師	栃木県幼稚園連合会
子ども生活学科	教授	田淵 光与	令和6年度「とちぎの幼小カリキュラム接続プロジェクト」	講師	栃木県教育委員会

			平成6年度芳賀町幼保小連携推進研修会 平成6年度茂木町幼保小連携協議会研修会 栃木県幼稚園連合会資質向上研修(ECEQ) 那須塩原市男女共同参画審議会 栃木県幼稚園連合会資質向上研修(ECEQ) 令和6年度家庭生活支援員養成講座	講師 講師 講師 委員 講師 講師	芳賀町教育委員会 茂木町教育委員会 栃木県幼稚園連合会 那須塩原市 宇都宮市幼稚園連合会 栃木県ひとり親家庭福祉連合会
子ども生活学科	教授	蟹江 教子	宇都宮市男女共同参画審議会 栃木県独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 運営協議会 栃木県職業能力開発審議会 栃木県男女共同参画審議会 那須町男女共同参画審議会	委員 委員 委員 委員 委員	宇都宮市 独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構 栃木県 栃木県 那須町
子ども生活学科	教授	月橋 春美	栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 宇都宮市冒険活動運営協議会 幼児期からの運動遊び普及検討委員会 令和6年度「運動会等の行事における運動遊びの出前講座」 令和6年度「幼児期の運動遊び指導者研修会」 令和6年度「親子で運動遊び教室」 令和6年度「運動遊び体験指導者派遣事業」 令和6年度「ふれあい運動遊び研修会」	理事 理事 委員 委員 講師 講師 講師 講師 講師	栃木県キャンプ協会 栃木県レクリエーション協会 宇都宮市 栃木県教員委員会 栃木県教育委員会 鹿沼市教育委員会 鹿沼市教育委員会 那須町教育委員会 茂木町教育委員会
子ども生活学科	教授	市川 舞	宇都宮市都市計画審議会 芳賀地区研修委員会研修会 栃木県幼稚園連合会教育研究大会 那須塩原市市民大学講座	委員 講師 講師 講師	宇都宮市 芳賀地区幼稚園連合会 栃木県幼稚園連合会 那須塩原市教育委員会
子ども生活学科	准教授	星 順子	鹿沼市子ども・子育て会議 鹿沼市こども未来部保育課保育主任等研修会	委員長 講師	鹿沼市 鹿沼市
子ども生活学科	准教授	石本 真紀	月の家(宇都宮市要支援児童放課後応援事業) 令和6年度栃木県要保護児童対策地域協議会調整機関調整担当者研修兼児童福祉司任用講習会及び任用前講習会 令和6年度栃木県スクールソーシャルワーカー活用事業 令和6年度スクールソーシャルワーカー養成研修会	生活支援 講師 スーパーバイザー 講師	特定非営利活動法人青少年の自立を支える会 栃木県中央児童相談所 栃木県教育委員会 栃木県教育委員会

			栃木県社会福祉士会スクールソーシャルワーク委員会	委員	栃木県社会福祉士会
子ども生活学科	准教授	大島美知恵	日本音楽療法学会関東支部 日本音楽療法学会選挙管理委員会 リトミック研究センター第一支局・第二支局 宇都宮市保健福祉総務課 富屋地区市民センター「子育て講演会」 2024全国レクリエーション大会とちぎ うつのみや音楽療法研究会第179回研究会	事務局長 委員 指導スタッフ 講師 講師 講師	日本音楽療法学会関東支部 日本音楽療法学会 リトミック研究センター第一支局・第二支局 宇都宮市保健福祉部 日本レクリエーション協会 うつのみや音楽療法研究会
子ども生活学科	准教授	松岡 展世	日本プレイセラピー協会 栃木県連合教育会 不登校セミナー 宇都宮市姿川地区市民センター 親子ふれあい広場	理事 講師 講師	日本プレイセラピー協会 栃木県連合教育会 宇都宮市
子ども生活学科	准教授	新井 祐子	東京藝術大学同声会栃木県支部 佐野クラシックコンサート 栃木県幼稚園連合会保育テクニカル研修 令和6年度那須塩原市市民大学講座 令和6年度宇都宮市民大学講座	会計監査 実行委員 講師 講師 講師	東京藝術大学同声会栃木県支部 佐野クラシックコンサート 栃木県幼稚園連合会 那須塩原市教育委員会 宇都宮市
子ども生活学科	専任講師	阿部 巧	令和6年度 特設授業 「英語の勉強について考える」 令和6年度 提案授業 小学校外国語活動 “What’s this?” 令和6年度 提案授業 中学校外国語科 「スピーキングとライティングの関連を生かした指導」 令和6年度 情報提供 「Can-Doリストの活用について」	講師 講師 講師 協力者	伊達市立大滝徳舜警学校 伊達市立大滝徳舜警学校 伊達市立大滝徳舜警学校 北海道教育大学附属旭川小学校
子ども生活学科	専任講師	霜触 智紀	令和6年度「幼児期の運動遊び指導者指導者研修会」 令和6年度「運動遊び体験指導者派遣事業」 令和6年度「運動遊び教室」「親子運動遊び研修会」 令和6年度「ふれあい運動遊び研修会」 第78回全国レクリエーション大会 令和6年度宇都宮市民大学講座 令和6年度スポーツクラブセミナー	講師 講師 講師 講師 実行委員 講師 講師	鹿沼市教育委員会 鹿沼市教育委員会 那須町教育委員会 茂木町教育委員会 全国レクリエーション協会 宇都宮市 栃木県スポーツ協会
子ども生活学科	専任講師	小野 貴之	令和6年度栃木県大学地域連携活動支援事業採択「親子遊びの会」 「科学する心を育てる」サークルエネモリ	講師 会員	栃木県・宇都宮共和大学 子育て支援研究センター 公益財団法人ソニー教育財団

Ⅲ. 宇都宮共和大学子育て支援研究センター規程

(設置)

第1条 宇都宮共和大学内に宇都宮共和大学子育て支援研究センター（以下、「研究センター」という）を置く。

(目的)

第2条 研究センターは保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした学際的、実証的な調査・研究を行うとともに、地域福祉の向上に資する政策提言を行う。

2 前項の調査・研究の推進によりわが国の保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした理論、政策の発展・向上に貢献するとともに、その成果を本学の教育内容に反映させることにより、本学の教育の充実、高度化を図る。

3 研究成果を地域社会に還元するとともに、地域社会との積極的な交流を図ることにより、地域福祉の向上に貢献する。

(事業)

第3条 研究センターは第2条の目的を達成するため、次の各号に掲げる事業をおこなう。

- 一 保育・幼児教育・子育て支援分野を中心にした自主研究、共同研究
- 二 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる受託調査・研究
- 三 保育・幼児教育・子育て支援関連資料、データの収集、整備
- 四 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言
- 五 保育・幼児教育・子育て支援の人材育成を目的としたセミナー、講座等の開講
- 六 講演会、シンポジウム、公開講座、研究会等の開催
- 七 経営等診断、研修、コンサルティング活動
- 八 大学、研究機関、企業、行政等との交流、連携活動
- 九 研究年報、研究レポート、A研究成果等の発刊
- 十 その他第2条の目的達成のために必要な事業

2 前項に規定する自主研究、共同研究及び受託調査・研究は、次の各号に定めるところによる。

- 一 自主研究 当該研究に携わる研究者の過半数を研究員が占める研究で研究センターの研究費を用いて実施する研究
- 二 共同研究 研究費の全部または一部を研究センター以外の諸組織、機関等の研究助成を受けて実施する研究
- 三 受託調査・研究 研究センター以外の諸組織、機関からの委託等を受けて行う調査・研究

(組織)

第4条 研究センターは、子育て支援研究センター長（以下、「センター長」という。）及び教授会から選出された研究員並びに本学学長（以下、「学長」という）が任命する事務職員によって組織する。ただし、事務職員は必要に応じて置くものとする。

2 センター長は、本学専任教員の中から、学長が任命する。ただし、学長が必要と認める場合は、本学専任教員以外の者を任命することができる。

3 研究センターに、副センター長及び運営委員長を置く。副センター長及び運営委員長は、研究員の中から学長が任命する。ただし、副センター長は置かないことができる。

- 4 センター長，副センター長，運営委員長及び研究員の任期は2年（年度基準）とし，再任は妨げない。
- 5 学長，副学長および学部長は，研究センターの事業に関し，指導，助言を行うことができる。
- 6 研究センターにおける研究に必要な場合，専任教員以外の研究者を客員研究員として研究に参加させることができる。客員研究員は，センター長が任命し，任期は対象となった研究等の完了時を上限とする。
- 7 研究センターの発展のため，学外の研究者，経営者等に名誉顧問，研究顧問を委嘱することができる。名誉顧問，研究顧問の委嘱は学長が行い，任期は2年とし，再任は妨げない。
- 8 前項の顧問は研究センター長の求めに応じて，研究センターの事業に関し助言，指導等を行う。

（運営）

第5条 センター長は研究センターを統括し，副センター長はこれを補佐する。

- 2 研究センターを運営し，諸事業を遂行するため，運営委員会を置く。運営委員会は運営委員長が主宰し，運営委員長が指名する数名の研究員を運営委員とする。運営委員長は運営委員の中から，必要に応じて副運営委員長を指名することができる。
- 3 研究センターの事業や活動を検討するため，全研究員参加の研究員会議を必要に応じて開催することができる。研究員会議はセンター長が召集し，主宰する。

（運営委員会の業務）

第6条 運営委員会は，研究センターの円滑な運営を図るため，次の業務を行う。

- 一 各年度の事業計画の策定及び予算原案の作成
- 二 研究員から提出される自主研究，共同研究及び受託調査・研究の企画書，予算案査定
- 三 保育・幼児教育・子育て支援等にかかわる政策提言の検討
- 四 第3条第1項第五号から七号までに掲げる事業の企画，運営，実施
- 五 研究年報，研究レポート，研究成果等の刊行，発表
- 六 研究センターの施設・設備，資料等の整備及び管理
- 七 その他研究センター運営に必要な業務

（予算及び会計処理）

第7条 研究センターの予算は次の収入による。

- 一 各年度の本学予算に定められた研究センター経費
 - 二 第3条に定められた受託調査・研究等の諸事業による収入
 - 三 寄付金
 - 四 その他の収入
- 2 受託調査・研究等に関する予算配分・原稿料等の基準については別に定める細則によるものとする。

第8条 予算執行にかかわる会計処理は本学の同規程を準用する。ただし，出張旅費等については，名誉顧問，研究顧問及び客員研究員にも適用されるものとする。

附 則

この規程は平成31年4月1日から施行する。

IV. 宇都宮共和大学客員研究員に関する要領

(趣旨)

第1条 この要領は、宇都宮共和大学都市経済研究センター規程第5条2及び子育て支援研究センター規程第5条2における客員研究員の取扱い等に関し、必要な事項について定めるものとする。

(称号の付与)

第2条 宇都宮共和大学都市経済研究センター及び子育て支援研究センター（以下「センター」という。）は、優れた知識、技術及び経験を有し、本学の研究・教育の充実発展に資すると認められる者に客員研究員の称号を付与することができる。

(指名)

第3条 客員研究員は、センター長が指名し、教授会に報告するものとする。

(付与期間)

第4条 客員研究員の称号は、年度ごとに付与する。ただし、年度途中の場合は、当該年度内の付与とする。

2 客員研究員の称号の付与期間は1年とし、再任を妨げない。

(施設の利用)

第5条 客員研究員は、学長の許可を受けて本学の施設等を利用することができる。

(遵守事項)

第6条 客員研究員が、本学において研究・教育に従事する場合は、本学の諸規則等を遵守するものとする。

2 客員研究員が、故意又は重大な過失によって本学に損害が生じたときは、客員研究員はその責めを負うものとする。

(謝金)

第7条 本学は、必要と認める場合、客員研究員に謝金を支給することができる。

2 前項に規定する謝金については、別に定める。

(交通費)

第8条 本学の依頼に基づき出張する場合は、交通費の全部又は一部を支給することができるものとする。

(称号の取消)

第9条 客員研究員が、本学の名誉を著しく傷つける行為をした場合は、センター長は客員研究員の称号を取り消すことができるものとする。この場合、教授会に報告するものとする。

(雑則)

第10条 この要領に定めるもののほか、客員研究員の取扱いに関し必要な事項は、センター長が別に定めるものとする。

附 則

この要領は、平成25年11月1日から施行する。

子育て支援研究センター運営委員会（2024年度）

センター長 田渕光与
運営委員長 石本真紀
運営委員 杉本太平 星順子 大島美知恵 松岡展世 小野貴之
客員研究員 高柳恭子 土沢薫 今村麻子 田所順子
名誉センター長 牧野カツコ

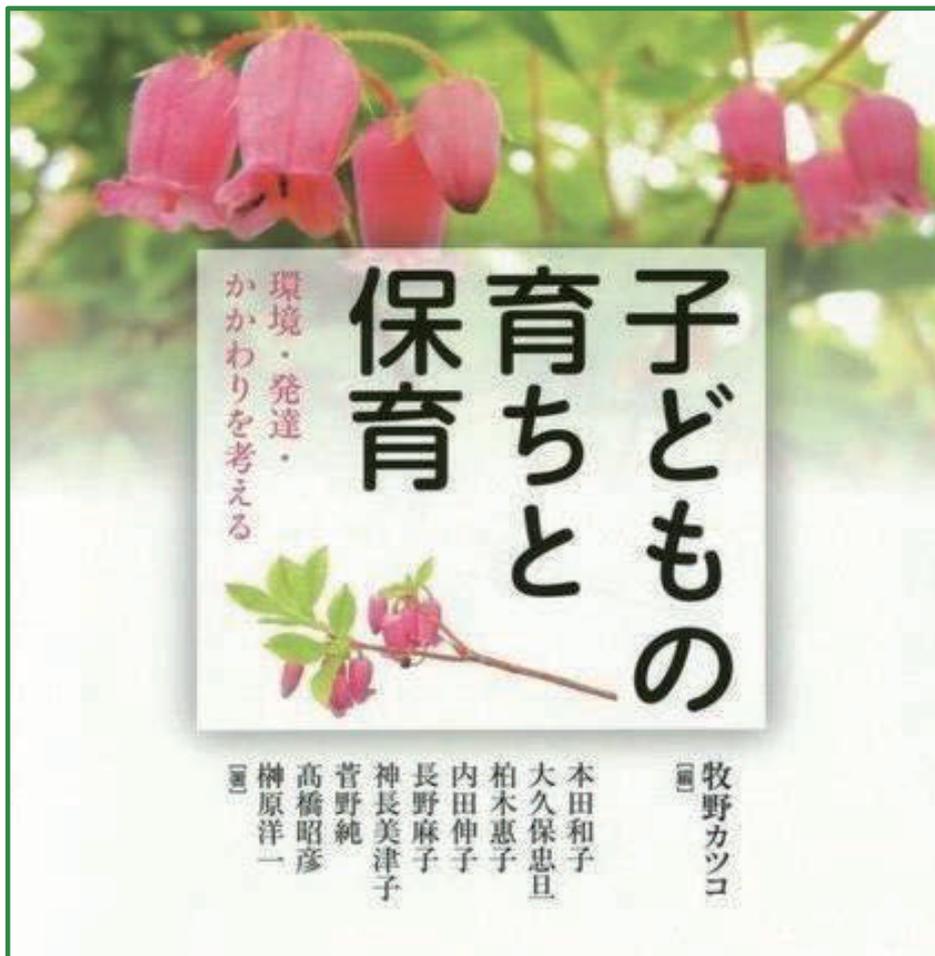
第15号編集担当 小野貴之

表紙デザイン 近江智子

研究センター年報 第15号

発行日 2025年3月31日
編集・発行 宇都宮共和大学子育て支援研究センター
〒321-0346
宇都宮市下荒針町長坂3829
TEL 028-649-0511(代)
FAX 028-649-0660
e-mail : kosodate@kyowa-u.ac.jp
Website : <http://www.kyowa-u.ac.jp>
印刷 株式会社 松井ビ・テ・オ・印刷
定価 1,000円（消費税込み）

宇都宮共和国子ども生活学部 子育て支援研究センター公開講座の記録が 装いを新たに、金子書房から出版されました。



目 次

I部 子どもが育つ社会・環境を 考える

1. 子どもへのまなざし
2. 子どもの成長と自然
3. 子どもが育つ条件

II部 子どもを育むかかわり方 を考える

4. 子どもの創造的想像力を育む親の役割
5. ことばと呼吸と音楽
6. 幼児期から児童期への教育

III部 気になる子どものケアを 考える

7. 生涯発達の心の基礎づくり
8. 医療的ケアが必要な子どものレスパイトケア
9. 気になる子どもと脳科学

人とのかかわりや自然から学ぶことの大切さ

子どもが安心して育つために必要なことを子育て支援の専門家らが提言。
お母さんにまかせきりにしない子育て、幼児期から児童期へのなめらかな接続、発達障害について知っておきたいことなど、いま、保育に求められる子どもの見方・かかわり方がわかる。

金子書房

定価 本体 2300 円＋税

表紙の写真は、栃木県那須高原で絶滅が危惧されているウラジロヨウラクというつつじの仲間です。本学名誉教授・元副学長 大久保忠旦先生が花の開花時期を見計らって那須高原に4回も足を運んで撮影されたものです。(本文 35 頁参照)

